

128
5
111

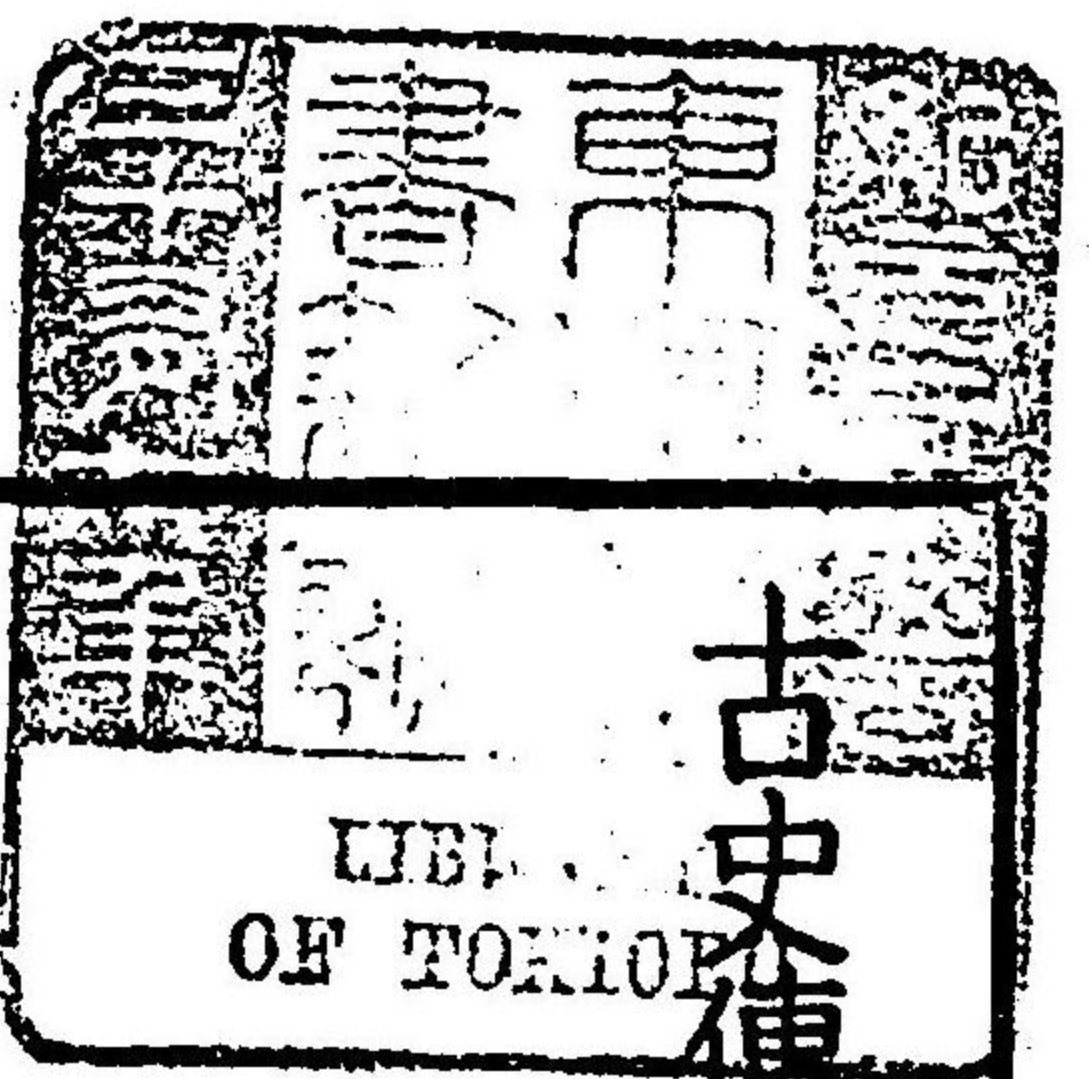
東 京 圖 書 館				
一 冊	二 號	三 架	四 函	和 書 門 史 類

古史傳

自第十五段
至第二十一段

五

128
36
3



古史傳五出卷

明治十年納付

東京府士族

東京書籍館

高瀬久

平篤胤謹撰

男 鐵胤

孫 延胤

續攷

神代上五出卷

五十

於是伊邪那岐命拔御佩出十

拳劔而斬其御子迦具土神而

爲給三段矣爾於其御刀出刃

垂落出血。激上而爲天出安河。

原在五百箇石村矣。復於其御。

刀出鋒。垂落出血。激越其磐石。

而成坐神。出名。磐裂神。次根裂。

神。二神矣。此神出子。磐筒出男。

神。次磐筒出女神。此者經津主。

神。出御祖也。復於其御。刀出鐔。

垂落出血。激越其磐石。而成坐。

神。出名。甕速日神。一神矣。此神。

出子。燖速日神。此者建御雷出。

男神出御祖也。是時出血激灑。

而。深石礫樹草。此草木沙石。自

然含火出縁也。故所斬出御刀

出名。謂天出尾羽張。亦謂伊都

出尾羽張神。亦謂稜威出雄走

神。

御佩之は下御刀此處に注しを見て辨ふべし。○十拳劔

は師云登都迦都留岐と訓る。八拳鬚七拳脛おどの例

也。能を添て読む。此はふ都留岐よて有。おむ御紀す。九握

八握劔を云も有。同じ法とあら。是を能を添て訓

とて有ぬべき所。みお十拳劔。拳は搏むふて。四指を並

ばある長け字云。されむ古書。掬字。上代了。手あて搏み

て。幾搏と物の長さを量れる。然爲る。おと今も遺れ

也。束も手して物字。ちて十拳は。劔身此長さを云ふ也。

纂疏。柄之量とあるを、都加と云語りたきて、誤り
給へるあり。柄を都加と云は、握む処ある故なり。と何
也。劔のおとは、下第七十段都牟下注せ也。○三段は、師云、
段を伎陀也と訓むを、和名抄ふ。筑前、固鞍手、郡、新分、爾比岐
多也何る。此、分、字、城、岐多と云同じ。豊後、大分、郡も、本は
たほまだあり。景行紀ふ。碩田也かきて。於保岐陀と訓注
有ぬ。○御刀を、師云、景行紀ふ。御刀此、彌波迦志と何
小依て訓る。倭建命、殺すハ、波加志とを、佩を延る、依言
れぬ。けて御佩給ふ劔、と云ふ也。其、用言、を體言、ふ言ひ
おして、即、其、物、の、名、と、表、る、こ、と。御執給ふ弓を、御執と云
小同じ。此、格古も今も、万
○垂落之血、血は知と訓る。師
云、

阿世と訓を非あり。血を阿世と云を、斎宮の
忌詞ふそあれ。常ふ然よまむは由あり。○激上而此、
三字を本ふ無を、予ぐ私ふ加、とるれ也。其を此、垂落る血、
天之安、河原ある。磐群と化ま、くば、激上れる事、論ひ無れ
ばあり。○天之安、河原也。安、下ふ之、字を加、ずても書まむ。
天上ふ何る河原あり。名、義、師云、古語拾遺ふ。天、八湍、河原
也。も有れむ。彌瀨之河、小也。書紀ふ。天、八十、河、中、と何るも
通ふ音、と云まむ。けて此河名は、下れ段くも見えて、皆
あり。同河あり。師云、神代の天上、此故事を云ふ。皆この河名を
らで、と流のいく筋も有て、大なる河を云ふる。と云ふと
云まむ。然ふは、非、其、天、上、ふ、山、と、し、云、予、む、香
山と云ふ。如く、河を此、河、山は、彼、山、に、限る。ほま、妙
ある由ある事あり。や、お、次、く、云、を、見、て、知、べ、し、万葉

ふ。天漢安之川原乃。ま。天漢安渡。とも詠る歌の。天漢と
書る字小依て。其事とれ思ひそと。師云凡て万葉小賦
を漢國ふて云おやあるを御國も憐ひて彼集を哥
ふも多く詠免る。其棚機女ま。安河あど云名ハ此方
古の傳を取引合せとる物あり。○因ふ云ふ。彼七夕此
故事ハ漢土の中。世人のふと言出と。漫談あるを詩
ふも賦るを。其風此方ふ移。七夕祭あど云事さ。引
あて。正あき事。哥よ詠み。七夕祭あど云事さ。引
て。其夜を。思ふ。世を。成よと。尋常の人ハ信ふ
然るこを。有。思ふ。世を。成よと。尋常の人ハ信ふ
心あるハ。天上を汚。妄説ぞ。あど云るも。何るを。哥作者
流ハ。然。思。さ。さ。ふ。互。競。ひ。相。ひ。あ。言。の。言。比
ば。去。あ。る。は。甚。く。か。と。を。ら。痛。し。や。加。茂。翁。の。七。夕。哥。ふ。あ
あ。ば。と。の。天。津。少。女。の。事。を。ご。ふ。あ。ち。と。く。誰。う。言。傳。へ。け
む。と。詠。れ。し。む。い。此。を。天。日。御。國。ふ。何。る。河。ぞ。引
せ。有。難。く。こ。そ。云。も。の。み。此。河。を。天。漢。の。あ。や。く。為。て。く。さ。く。云。へ。る。妄
説。を。始。免。俗。よ。も。其。事。と。非。心。得。し。と。る。徒。も。多。う。れ。む。か

くは云
あり。○五百箇石村古事記ふは湯津石村とあり。師云
縣居大人説ふ。五百を約免て由と云。今云伊富を切む
ぞ由とは殊不近く通ふ音あり。自を湯津桂湯津爪櫛か
古言ふ。由とも与とも云ふ類あり。○其磐村を。御刀
ども。枝比多く。齒の繁。此字云ふ。村を群の意ありとあり。
万葉一ふ。河上比湯津磐村。ま。祝詞
よ。湯津磐村乃如。塞。坐。と云ふ語多し。○其磐村を。御刀
比刃の皿比。天之安。河原ふ。激。上。り。て。ま。於。成。ま。る。磐。村。を
云ふ。○激越の訓。古事記。走。就。と。あり。を。師。の。多。婆。斯
理。都。伎。と。訓。て。万。葉。十。ふ。我。袖。小。電。手。走。依。ま。と。二十。ふ。霜
上。ふ。何。ら。ま。多。婆。之。理。何。と。あり。俗。と。ば。あり。と云。せ。云
れ。し。よ。依。れ。ゆ。○磐裂神根裂神。神代卷。磐裂。此。云。以。籛

娑窶サウと何ナニ也。名義ナシ也。師云。式の祝詞イハレコト。磐根木イハネキ。根履ネジ。佐久彌サクヤ氏。万葉二マンヤクニ。石根イハネ。佐久見手サクヤテ。名積ナツミ來キ之シ。まと六ム卷マキよハ五イ百ヒャク二十ニ。卷マキよハ浪ナミの間マまハいハゆキ也ナリ。あハど有アるコト。或シ説ハふコト。人ヒト面オモれタるコト。おハくハ何ナニるコトをシ。志シやクみミおハるコトと云ハふコト。同ナニくテ。岩イハれハ凸トビ凹カボ何ナニるコト上ウをシ。通ト行ク字ジ云ハれタ也ナリ。馬ウマばク也ナリ。やウ云ハふコト。能ノの面オモれタるコト。ちウくハみミやウ云ハふコト。あハいハもモ。同ナニ詞ジありコトと云ハふコト。此コノ意イれタるコト。源ゲン氏シ物モノ語ゴあハざカしシ死シをシ。さクおハよハひハるコト。あハるコト。もモ。平ヘイ穩ウンあハらハぬコト。意イふコト。同ナニじシ。或シ説ハふコト。岩イハ根ネをシ。履ハ裂レてハ行ク。ありコトと云ハふコト。ちウてハ此コノ神カミ。名ナはハ石イハ根ネ拆サと云ハふコト。二ニ分ワちテ。二ニ柱ハシ小コ名ナけタるコト。物モノあハれタるコト。根ネもモ石イハ根ネの意イれタるコト也ナリ。○此コノ神カミとハ磐イハ裂レ根ネ裂レ神カミをシ。申マウせタ也ナリ。但シ此コノ神カミ代タ紀キ下カ。卷マキよハ磐イハ裂レ根ネ裂レ神カミとハ何ナニ子コ。磐イハ筒ツツ。男オトコ。磐イハ筒ツツ。女メ。所トコロ生ナ之シ。經キ津ツ主ヌシ。神カミとハ何ナニ

るコト。依ヨてハありコト。○磐イハ筒ツツ之シ。男オトコ。神カミ。磐イハ筒ツツ之シ。女メ。神カミ。名ナ義シ。磐イハはハ御ミ親コト。神カミのシ。磐イハ筒ツツ。借カ字ジふテ。都ツ知チふコト。通トひコト。塩シホ土ツチ。老オ翁ウをシ。塩シホ筒ツツとハ何ナニもモ。あハるコト。ふテ。悟サトべシ。其コノ都ツ也ナリ。例レイのシ。之シ。ふコト。通トふコト。辭ハ。知チてハ女メ男オトコ共ニ了ス云ハふコト。尊ツノ稱ショウあハいハとハ。上ウふコト。云ハふコト也ナリ。第ダイ二ニ段ダン。葦アシ牙キバ比ヒ。古コ遲チ。神カミのシ。處トコロ。○此コノ者モノ。經キ津ツ主ヌシ。神カミ之シ。御ミ祖ソ也ナリ。經キ津ツ主ヌシ。神カミをシ。皇スメ美メ麻マ。命ノミ。天アメ降ク坐マりシ時トキ。功イサのシ。卓タク越ゲ坐マりシてハ。名ナ高タカきコト。神カミふコト。坐マりシ故ユ也ナリ。此コノ。其コノ御ミ祖ソのシ。成ナ坐マりシ依ヨ因インふコト。まハおハ其コノ出デ自チ我ガ知チらズ。志シ。免メとハるコト。傳ツタへタ也ナリ。第ダイ百ヒャク十三サン段ダン。傳ツタへタ云ハふコト。べシ。○鐔ツツ。和ニ名ナ抄シヨウ。唐タウ韻イン曰ハク。鐔ツツ。劍ケン。鼻ハナ也ナリ。和ニ名ナ都ツ美メ波ハとハ何ナニ也ナリ。今イマ都ツ婆ハとハ云ハふコト。物モノあハりコト也ナリ。○甕ツツ速ソク日ニチ。神カミ也ナリ。師シ云ハふコト。美メ迦カ波ハ夜ヤ備ビ也ナリ。訓クニ法ホウ也ナリ。今イマ云ハふコト。ふテ。之シ。をシ。添ソてハ。唱ナゲふコト。るコト。非ヒぬコト。とハ。まハとハ備ビとハ濁ダクるコト。べきコト。由ユもモ。第ダイ三サン十ジュウ四シヨウ段ダン。勝シヨウ速ソク日ニチ。命ノミのシ。處トコロ。師シ説ハをシ。注チュウ考コウをシ。見ミるコト。べシ。

神之御祖也。建御雷之男神也。皇美麻命。此御天降の時。功此卓越坐して。名高き神。小坐故。此小其御祖。此成坐る因よ。未だそ此出自を知らず。免と伝ふ。師は古事記に依て。此神と布都主神とは。一柱に坐りよし。委曲に解置れおき。熟考ふ。此を二柱ふ。一柱の如く。一柱うと思ふ。此處に成坐る御祖も。詳ふ別にて。正志く二柱ふして。其差の鬢髪。此は幽死所以あり。事と所思も。由あり。其を下ふ云へり。第一百十三段。武甕槌之男神の亦名の出たる処。○此時之血とは。火神を斬給へる時。激上れる血を云て。即火あり。○激灑而染石礫樹草とは。其火此

天上に激上れるのみあらば。此因土ある石礫草木も。激に著ると云。○草木沙石。自然含火を。聞えある儘あれど。此はあづふ。其一端を云る傳ふて。實ハ物として。火を含まぬ物れし。其は石と金と。火焔含たる事は。更にも云を。木と木を隣りて。火焔出し。海底に生出る物。子小。火は含はる有る小れも。其を下に見えたる。櫛八玉。神の海底ある海布海尊。字。昨出て火を鑽出。○天之尾羽張。師云。或説。尾を鋒を云。二云。劍を諸刃ふて。鋒の方此張る物ある故。云。因名。の尾張も。熱田此神。劍を云て出。此意れ。云。此説然も有。鋒を尾と云こと。いまど例。鋒の張る劍

を云ふるは、はと尾を雄ふて。雄く志死を云ふも有は
し。稜威之雄走とも云名の。稜威之雄誥、羽を刃此意あ
ど云る言れ連きせ。同きをも思ふべし。針と云意
あべし。今、世り波婆理と云針を刃のおきとる針と云意
あべし。よや若まよ、刃張の針と云意此名あらむ。此を同
じまよ物此満をびある事。○伊都之尾羽張神。稜威之雄
走神。前ふは直ふ。其御刀裁さして云、は故ふ。神と云、はる
残。此を其御霊を云ゆる。神を云ふ。さて伊都は。本ふ。稜
威此云伊都。と有は字採れ。師云此は。伊知速の伊知と
同言ふて。知波夜夫流の知も是あり。此等の詞此意を冠
條よ委。はる此言れ例は。稜威之雄誥。稜威之道別。稜威之
く見も。噴讓れと云て。武きを云言あり。稜威字を文選に見えと
ゆ。はて漢書よ。威稜憐乎

隣国注よ。神霊之威、曰稜と云。有は。信友云。此伊都は。武
ゆ。この意ふてぞ書れらむ。死を云言れ。はと伊豆とも云て。齋清淨於る意尔も
云ふ言ふ。伊豆能賣。嚴彌都波女。嚴山雷。云言いせ多し。
れどの伊豆或あるは是ふて。もと同言れ。健きふは清
く。清死ふは健き意。何。熟く味ひて知はし。と云。牙ゆ。此
信友が正ト考ふ。委く考。牙て記しかるを。説
長れ。此処よ。ハ。何らましを取て記し。は。は。雄走
とは。師説よ。雄は上ふ云る如く。雄い。志死を云ふ。走を劔
の利をいふ。利を疾と同言ふて。走と意同じ。俗よ。口利く
走ると云。も同じ。云。は。は。は。上。件。此。神。等。は。此。御。刀。此。御。霊。を。火。
神の御霊とふ因て。生坐。其由下ふ。○此段ふ。御

名は出ある神等。御刀の御霊、去ばて八柱あるまど。此時成
 坐る神也。磐裂神。根裂神。甕速日神のみふて。磐筒之男。磐
 筒之女神。燐速火神也。經津主。武甕槌之男神の出自を語
 るとて。此處に御名は出とるなり。此者經津主神之御祖也。此者武甕槌之男神
之御祖也。とある文よ 心を付て辨ふべし。けりて磐裂根裂神。甕速日神。去ばて
 ち。御刀を火に因て化れる。石村ふ所生れど。分て云はる
 磐裂根裂神二柱也。石村ふと也。其を始終御刀の刃をり垂落れる血は化とる。磐
村の磐てふ語を名に負坐し其子をも 石 甕速日神也。御
筒之男。石筒之女神と申はを思ふ 去ばし。 刀ふとれ也。第百十三段。稜威之雄走神之 甕速日神
之子。燐速日神之子。武甕槌之男神とあるを 思ふ。かくて石ふ因れ依神也。二ばしら成坐し。其子も石筒之男。石

筒之女神 二柱坐也。御刀ふ因れる神也。一柱成坐也。其子も燐速日神一柱あり
 此を幽き謂はる事あはるるれど。凡人は測知るべきあ
 とふ非也。但し磐裂神。根裂神。二柱。磐筒之男神。磐筒之
女。神と二柱ふハ坐せど一柱ふして二柱と坐 し。二柱ふして一柱ふ坐あらむを思ふ。其を神代紀に。磐
裂根裂神之子。磐筒男。磐筒女。神之子。經津主神とある趣 のあう聞ゆるを第十二段。神五神也。と扱それ火を御刀
ある下ふ云。依説よ。思ひ合せて曉はし。 扱それ火を御刀
 ちふ因りて成坐る。二御胤の神也。正志く二柱ふして。經津
主。神。武甕槌 神を申は。 後ふち一柱と坐まして。其を稜威之雄走神
此子と申し。おれ即御刀の御霊あり。 けりて劔ハ火に焼死。まも石ふ研
 て其用を外去物れまぞ。火を御刀とふ因て成坐る神等。
 みち武甕槌神は徳を助成して。其功は去ばて此神ふ約

まに。因生固坐坐る二柱神の大正統坐坐皇美麻命の
天降坐して。此因土所知看は時ふ。此因土は荒ぶる神を
言向ま志ふ。伊邪那岐大神は。此時の御稜威の。其時顯れ
あるふとは。幽き謂はるまといふも。○此段は傳ふ
因て。悟得あることやれ事あは。其は火神を斬給へる。御刀
は刃を垂落れる血の。天上ふ激上して。まは五百箇磐
村と化して。はと其鋒と鑢とめ志ふ。血も。悉ふ其磐村
小激越死て。神等の生坐るを想ふふ。火を如此生出し初
とて。上り昇る勢氣何る物ふて。今現も其の如く。燃立
勢は昇て何ぐあは。深き謂あは事あるは。天日御因

を。目はあま見放奉るふ。火の盛ふ燃て見やあは。此の
傳乃謂ふ依て。火の寄憑て有る故。此因土とては。燃る
火よ見ゆるあはる。然在て。天をその萌騰まる初とて。
澄明き質れるが上ふ。火は寄憑るが故ふ。はましく明く。
此後日神の所知看はましく爲して。その大御光は照徹
坐して。彌く益々明たふぞ有ける。外因人あど。斯在謂の
の因土とめ見放るま。日ハ火の凝集れる物ぞと云
ひ。或は火精ぞあどのみ云ゆる。神代は古傳は傳ら
ざればありや。但し其は外因人こそ然も有ら。御因
人あらふ。只其説を此み信じて。此は古傳を尋むもの
とも思ひくら。然て。はて因土とめ打見ては。火ふ見やあ
いや悲しくこそ。を以て。神の御世よ。比とは云はあは。然るを沼
河比賣神

の哥よ青山ふ比ぐ隠らぬ玉の夜も出あむと詠る
比を天日をさして云るあり。猶此哥比ことハ第九十八
段よ云ふ。然在を燃る火と言義の異れり事形きを漢字
を見べし。參渡して後ふ。天於比ふは日字を何て。燃依比ふを火字
を當とるを以て。言義の異れりが如く思ハるゝを。此乃
元の謂を深く考へざればあめ。さて然天於日ふ寄憑る
火氣此虚空ふちで満て。至らぬ隈あく。産靈此神靈を佐
けおく。地よ照入り。土氣鹽氣火氣相和ちて。千ぢふ變て。
万ぢふ化て。彼硫黄塩硝おど云を始終くさくか
る類の物此多うるを皆これふ因て成る
物類を生成して。青人草此要を爲し。其産し成せる草
木を以て。火を集むれむ。大死くも小くも凝集て。そき燃

盡れば灰と化て残て。まよ此を分れむ。土火氣は元の虚
と塩とお分るれり。火氣は元の虚
空ふ歸る。まれぞ火産靈神の徳此あらはしふは有ける。
實よ火をうて奇靈ある物を有らじぞ思ふ。是就て
く妙ある事物此称言ふ比てふ言を云む。世よ火をうり
奇異き物のおき故。其名を借て。弘く言ひあらるるあ
らむ。あ布次と言
ふを見はらむ。

六十

爾其被殺坐出。迦具土神出御
駭出。每段各化神矣。於其一段

ナリマセルカミノ三十八オホイカツチノカミツギニソノヒト
成坐神出名。大雷神。次於其一。

キダナリマセルカミノ三十八オホヤマツミノカミツギニ
段成坐神出名。大山祇神。次於

ソノヒトキダナリマセルカミノ三十八タカオカミノカミアハセテ
其一段成坐神出名。高靈神。凡

ミバシラマス。マタノツタヘニイハク。カ。グ。ツチノカミ
三神矣。一傳云。迦具土神出於

津見神。次於曾成坐神出名。正鹿山
滕山津見神。次於腹成坐神出

ミナハ。カク。ヤマ。ツ。ミ。カミ。ツギニ。ラ。セ。ナリ。マセル。カミ
名。奥山津見神。次於陰成坐神
出。名。闇山津見神。次於左
坐。神。出。名。志藝山津見神。次於
右。手。成。坐。神。出。名。羽山津見神。次於
次。於。左。足。成。坐。神。出。名。原山津
見。神。次。於。右。足。成。坐。神。出。名。戸
山。津。見。神。并。八。神。也。

被殺た。許呂佐延と訓法し。佐延を佐礼の古言。○御骸ハ。

美加婆禰と訓て。幹骨の義ルる法し。ラは省かゆ保と婆

○大雷神。雷ハ。師説ふ。万葉三ふ。伊加土佛足石の御歌ふ。伊加豆知。おまら此名此正しく見とるあり。名意ハ嚴ふ。豆之例の之ふ通ふ助辭。知は美稱なりとあり。さて伊加豆知と云言義ハ。師説此如くふして。其伊加豆知と名ふ負る物を。普く考す通ふ。凡て猛く嚴きをバ。神をも物をも弘く稱ふ古言ありぬ。其火神を火雷と云ひ。山積神を山雷と云ひ。武甕槌神を健雷と云ひ。天忍雲根命を鳴雷と云ひ。此事第四百三十三段。委く注べし。はと三諸岳神の大蛇の形ありしを。雷と云ふ。此事。雄略天皇。卷ふ見えとあり。外どを以て。剛く猛き物なり。ひろく稱ふ言あるを曉べし。下。小豫母都醜女を雷と

云り。合せ。けて伊加豆知とは。かく弘く言稱ある哉。世々考ふべし。けて伊加豆知とは。かく弘く言稱ある哉。世々雷神をのべ。嚴く猛きハ。外ど故ふ。專この神此稱とあり。まは。然る例い。扱去の御骸も。まは此神の成坐るま。伊邪那岐大神此甚く怒坐して。此御所爲あり。況て御母神も。心惡子と詔するば。この猛く剛き火雷神。此殺けえ給ふ。そ此御怒も有べけき。始ふ此神の生出給ひ。むこと。然有はき理あり。此神此徳此事。下。今。字。今。本。火。と。作。る。を。今。ハ。信。友。ガ。異。本。三。多。神名式ふ。和泉国大島郡大雷神社。大。字。今。本。火。と。作。る。を。今。ハ。信。友。ガ。異。本。三。多。校合せて改とる。依れ。ま。雷を電と作る本も有り。同じあり。越前国丹生郡雷神社。但馬国氣多郡雷神社。名。神。仁明天皇紀。承和九年十月

乙亥預官社。清和天皇紀。貞觀十年十二月廿七日。從五位下雷神從五位上。とあり。はと此とゆ以前。文武天皇紀。慶雲三年七月乙丑。丹波但馬二國山災。遣使奉幣帛于神祇。即雷聲忽應。不撲自滅。と云事も見えと。ま。文德天皇紀。齊衡元年四月丙辰。投河内國大雷。大明神從五位下。ともあり。○大山祇神。祇字ハ津見と訓む。清音あり。豆美を濁して唱るハ非あ名義。縣居大人の師説ふ。津を例の之。ふ通ふ助辭。見を比ふ通ひて。かの産靈れど。此靈あ。けて津見を。禍津日神。庭津日神。あど。此津日。を義同じ。と云れ。とる。ふ從ふ。は。し。神名式。伊豫國。越智郡。大山積神社。名神大。○名神祭式。此神のあき

を脱とるあり。其を承和四年四月改曆雜事記曰。崇峻天預名神と。続後紀よ見ゆれ。あり。皇御宇庚戌歲。伊與國越智郡。三嶋大明神出現。光仁天皇寶龜十己未。自伊與此處鎮座也。乃大山祇尊也。とあり。○當國風土記。宇知郡御嶋坐神。御名。大山積神。一名和多志。大神也。是神者。所顯難波高津宮御宇。天皇御世。此神自百濟國度來坐。而津國御嶋坐。謂御嶋也。とあり。此神の百濟國より度來坐。りと云記。い。ぶ。う。し。き。傳。あ。れ。ぞ。高津宮御世と云。説。を。由。り。る。傳。あ。る。べ。し。は。る。ハ。あ。れ。神。今。も。大。三。島。を。云。島。よ。鎮。坐。は。由。り。て。其。三。島。と。云。ふ。地。名。ハ。津。國。の。三。島。と。り。移。せ。る。名。あ。ら。ば。高津宮御世。ま。づ。津。國。三。島。ふ。坐。る。を。故。あり。て。當。國。を。移。し。と。る。こ。と。を。詠。り。傳。へ。る。あ。ら。む。と。思。ハ。る。れ。ぞ。あ。り。一。名。を。和。多。志。大。神。と。申。は。も。他。所。ふ。度。し。奉。ま。は。ふ。由。て。の。御。名。あ。る。べ。し。他。所。へ。移。し。と。る。を。和。多。須。と。云。る。例。を。五。十。猛。神。の。御。妹。大。屋。津。比。賣。

命。楓津比賣命を木圍よ。稱徳天皇紀。天平神護二年四月
渡奉ると何は是あり。甲辰授從四位下。充神戶五烟と見え。仁明天皇紀。承和四
年八月戊戌預名神清和天皇紀。貞觀二年閏十月加從三
位。同八年閏三月加正三位。同十二年八月從二位。同十七
年三月廿九日授正二位と何也。東齋隨筆よ。參議佐理大
風浪惡不能發船。夢三島神告曰。乞書額。乃書。應。時海上
穩。榜曰。日本總鎮守大山積明神と見え。まこと十訓抄よ。能
因入道俗名承永伊豫守実綱よ。伴ひて彼國よ下ゆ。能
ふ。夏の初日久しく照て。民の歎。浅うらざりける。ふ。神を
和。哥ふ。感給ふものあり。試よ。詠て。三島よ奉依べき由を
圍。司。頻。了。け。免。れ。バ。天。河。苗。代。水。ふ。せ。き。下。せ。天。く。ど
巴。未。以。神。あ。ら。む。神。と。詠。る。幣。よ。書。て。社。司。を。し。て。申。上
させ。と。ゆ。ゆ。ま。ま。バ。炎。早。の。天。俄。ふ。く。も。ゆ。て。大。あ。る。雨。降。て
枯。たる。稻。葉。た。は。お。ぼ。て。緑。了。う。り。な。る。と。あり。け。て。山
此。哥。金。葉。集。よ。收。て。そ。此。詞。書。よ。圍。の。一。宮。を。何。也。け。て。山

津見神也。山を堂給ふを木を山ふ生る物ある故ふ山開
ふは此神を祭るぞ古道ある。其を末於大殿祭詞よ。皇御
孫命乃御殿乎。今奥山乃大峽小峽爾立留木乎。考云。峽を
間あり。万葉ふ。山乃多和と云。るも相似とゆ。此了大山小山ふど
万葉ふ。山乃多和と云。るも相似とゆ。此了大山小山ふど
い。を。で。峽。と。云。を。思。ふ。よ。今。も。見。る。ご。と。良。材。を。嶺。れ。ぞ。よ
は。あ。ら。で。山。の。多。己。み。り。多。き。も。の。あ。れ。バ。か。く。云。ふ。う。
齋部能齋斧乎。以伐採互。考云。貞觀儀式の大嘗宮。條よ。稻
院。料。材。向。上。食。山。即。祭。山。神。云。く。祭。畢。造。酒。童。女。云。く。為。採。内
伐。樹。工。匠。次。之。役。夫。次。之。訖。歸。來。と。何。ゆ。こ。此。類。よ。て。常。の
宮。造。り。の。材。を。バ。忌。部。そ。の。山。了。向。ひ。て。祭。し。て。伐。始。る。こ
と。此。文。小。て。知。べ。し。記。よ。も。後。此。物。よ。も。宮。材。を。採。よ。山。神
木。靈。を。祭。る。こ。本。末。乎。波。山。神。爾。祭。互。中。間。乎。持。出。來。互。考
を。見。え。と。ゆ。り。本。末。乎。波。山。神。爾。祭。互。中。間。乎。持。出。來。互。考
云。今。も。遠。江。國。人。ハ。大。木。を。伐。て。ハ。そ。の。梢。を。折。て。切。と。依

本株の中らふけし立るあり古も然あるを本末を山神
ふ祭ると云ふらむ他國ふてを志り為依り問ふべし
と何にほと山口ふ鎮坐は山神あるを祭る詞ふ山口坐
皇神等此者山神ふ坐事こと上ふ引る能前爾白久飛鳥
高市石寸十市忍坂城上長谷同ふ引る能前爾白久飛鳥
御名者白豆考云其社の在所を御名と云ふせるあり凡
を月次新嘗ふ祭らるはて畝火耳無を孤立し山ふて今
ふてを宮材とあ依るべき木を何ら祓といと上代よ去此
六の山ふて採初られし故有て諸國ふて採せら依り
もま扱こ此山口の社を祭りよるふ事とや成おらむ
遠山近山爾生立留大木小木乎本末打切互持參來氏考
遠き山を諸國の山あり万葉ふ藤原の宮造此材を近江
の田上を此外四方に國々をり持參る事を云ふ是を以
て此を知らべし近き山をこの六に皇御孫命能瑞能御舍
山のみあらば去て近きを云ふ

仕奉氏天御蔭日御蔭登隱坐氏天ハ雨の借字ふて雨を
屋あるを文ふか安因登平久知食須賀故皇御孫命能宇
く云ひれせめ

豆乃幣帛乎稱辭竟奉久登宣と何るを以て知はしはて

此祝詞小見え給へる山口乃社くは式ふ大和國高市郡

飛鳥山口坐神社大月次新嘗○この社を今飛鳥村同郡

畝火山口坐神社大月次新嘗○去此社むうしは畝火山

十市郡石村山口神社大月次新嘗○村本ふ寸よ作るを

正しく同郡耳成山口神社大月次新嘗○此社を今俗ふ天

と或書城上郡長谷山口坐神社大月次新嘗○此社を今

ふい同郡忍坂山口坐神社大月次新嘗○此社を今赤尾

と或書ふ。やゝある即是ふ也。此御社ども何きも清和天皇
紀。貞觀元年正月廿七日。正五位下を授奉已給へり。亦本
此外ふ。山口神社と申ひが多く有て。添上郡夜支布山口
神社。大月次。文德天皇紀。嘉祥三年十月辛亥從五位下。清
和天皇紀。貞觀元年正月廿七日。正五位上。大の社と今大
在て。天王と稱と。或書ふ云。平群郡伊古麻山口神社。大
和名抄ふ。楊生也。木布とあり。椽原村と云ふ。在
次。新嘗。大の社と。椽原村と云ふ。在
て。今を滝宮と稱よし。或書了云へり。葛上郡巨勢山口
神社。大月次。新嘗。○此社と。今関屋同郡鴨山口神社。大月
嘗。○大の社と。帳考ふ。在。俱尸羅村。高鴨山。葛下郡當麻山
松樹一株。下。在小祠土人云。樹頭時見。聖灯。葛下郡當麻山
口神社。大月次。新嘗。○大より下五字本。脱とる。信友
ダ一本。了依て補ひ。大十三座とある。了合りと云

る。ふ從ひ於この社と。高雄寺山口の薬師堂。同郡大坂山
の西了在て。今新宮と稱とし。帳考ふ云。同郡大坂山
口神社。大月次。新嘗。○大の社と。穴蒸村と云ふ。吉野郡吉
野山口神社。大月次。新嘗。○此社と。龍門莊山口村了山
邊郡都祁山口神社。大月次。新嘗。○大の社と。山口村
あるも。凡て山神を知法し。ちて伊古麻山口神社と。ゆ下。
七社。並ふ。貞觀元年正月廿七日。正五位下を授奉給へり。
ちて祝詞を見え給へる六社の中。四社と。並り山口坐
と。あるを。夜支布山口神社より下八社は。坐と云。さるハ
何。亦依。由了。又祝詞を見え。さる六社と。ゆ。位階
の。高く坐。候。こと。も。何。ある。由。ふ。未。考。へ。得。交。次。段。ふ。
引。る。四。時。祭。式。廣。瀨。大。忌。祭。條。よ。是。日。以。山。口。十。四。座。合。祭。
と有依ハ。此御社どもれ也。はと山城國愛宕郡賀茂山口

神社の也。清和天皇紀。貞觀元年正月廿七日。從五位下を
授奉り給へ。此も山神坐候こと。○高麗神。靈ハ御紀
ふ。此云於箇美と見え。記よ後淤加美と書る。依て訓法
志。字書。龍也。又靈神也とも。○高麗神。靈ハ御紀
淤加の意を思得。美は龍蛇の類。稱あり。和名抄。水
神。ま。蛟を。和名美豆。知。と。ある。美。ま。ま。れ。也。豆。例の
辞。知。を。等。稱。り。て。野。推。お。どの。例。此。如。し。は。と。蛇。蝮。れ。ぞ。れ。美。も。此。あり。諺。の。已
を。美。を。訓。る。も。此。意。あり。景。行。天。皇。卷。ふ。天。皇。豐。國。ふ。行。幸。依。時。ふ。御
膳。ふ。仕。奉。候。人。泉。水。を。汲。け。る。う。蛇。靈。の。居。と。し。の。ば。天
皇。必。將。有。鼻。莫。令。汲。と。勅。牙。候。と。有。り。万。葉。二。ふ。吾。崗。之

於可美爾言而令落雪之摧之彼所爾塵家武とある。され
らを思ふ。此神ハ龍ふて。雨を物出する神れ。を云れと
依が如し。けて高と申候。靈神の何依が中ふ。此を初
生。出。ま。あ。て。其。を。統。領。也。給。ふ。故。ふ。稱。あり。法。し。け。て。此。も
い。を。猛。き。物。あ。ま。バ。御。父。子。此。御。怒。よ。因。て。ぞ。成。ふ。む。甚
怒りて死し人あどの。後。雷。ふ。あり。蛇。ふ。あり。て。復。出。る
こと。昔。も。今。も。多。た。ハ。是。故。ぞ。古。く。ハ。上。毛。野。君。田。道。の。靈
の大蛇と化りて。蝦夷どもを。殺。し。と。る。あ。ど。を。思。ふ。べ。し。神。名。式。ふ。備。後。國。甲。奴。郡。ふ。
意。加。美。神。社。惠。蘇。郡。よ。多。加。意。加。美。神。社。河。内。國。石。川。郡。よ。
太。祁。於。賀。美。神。社。志。了。今。在。古。市。郡。大。黒。村。稱。山。王。を。云。り。
法。き。う。ま。と。式。ふ。此。社。ふ。並。て。建。ま。と。茨。田。郡。ふ。意。賀。美。神。
水分。神。社。も。何。由。何。事。あり。ま。と。茨。田。郡。ふ。意。賀。美。神。

社。志小。在伊加賀村。後山と云り。和泉、固和泉郡小。意賀美神社。志了。武塔上。村と云り。越前、固坂井郡。意賀美、志了。武塔上。村と云り。云り。

神社。壹岐、嶋石田郡。固津意加美神社。志了。武塔上。村と云り。大和、固吉野郡。丹生川上雨師神社。志了。武塔上。村と云り。

次新嘗。○雨師、字本。本脱とるを、今諸書小依て加へたり。

さて雨師と云も、漢風の称あり。辰日雨師者龍也と云。此神を

本紀曰。不聞人。豈之深山。吉野丹生川上。立我宮。柱以敬

祀者。為天下降甘雨。止霖雨者。依神宣造。件社云く。と云り。

多併せ考べし。注式の或説。○靈神と云るハ正説あり。餘

丹生川上雨師神。正五位上。同八年九月戊戌從四位下。同

十年九月戊戌從四位上。ま。と文德天皇紀。嘉祥三年七月

丙戌正四位下。清和天皇紀。貞觀元年正月廿七日從三位。陽成天皇紀。元慶元年六月廿三日正三位。さて此社を註

式。天武天皇、白鳳四年御垂跡。當社爲大和之別社。事見

延喜格と云。○此と大和神社記小も見とり。引て考

予止雨の奉幣使あせ立られ。頃後醍醐天皇御製。此

此里を丹生川上。と云。近。祈らむはまよ。五月雨の空

はと相摸。固大住郡。阿夫利神社。も此神ある。今謂也

の說。元八大龍王と稱へるを、其社を別當八大坊の門

前。依。高。移。額。大山。地。主。と記し。何りと云り。

此。依。時。八。大。坊。の。門。前。小。移。せ。る。あ。ら。む。さ。て。八。大

龍王と云。例の僧ども。此。号。け。さ。る。ハ。有。れ。ど。龍。王。と。云

の。正。字。あり。但し。八。大。龍。王。と。云。号。を。於。ル。も。い。や。古

祀事とい見えよめ。其を鎌倉右大臣殿の哥ふ時ふとめ
まぐれむ民のあがきあり。八大龍王雨止免給へ。と詠ま
あむ。此社を云ふ。れらむと思むる。れバあり。まも八大坊
と云も。此号とり扱けとる。ふぞ有べき。猶この社。此事ふ
付て。僧徒のかき乱せ。事いと多る。を。今
委しく辨へむ。も煩む。し。れむ。此ふ云む。ま。今
清和天皇紀。貞觀十二年八月。授伊豫国正四位下龍神。正
四位上。とも。何。此社。今。何。処。ふ。在。ま。と。大和。国。宇陀。郡。小
室生龍穴神社。あ。ゆ。も。此。神。あ。る。う。貞觀九年八月。大和国
從五位下。櫻生龍穴神。正五位下。と。何。也。松下見林。室生山
事。彼。山。有。三。龍。穴。云。く。龍。穴。之。底。入。十五。丈。有。五。丈。池。左。右
有。穴。左。穴。最。方。也。此。内。有。石。戸。廣。三尺。厚。二。寸。以。為。戸。扉。云
云。此。内。入。七。尺。大。岩。有。之。從。地。一。尺。二。寸。上。有。最。方。穴。廣。一
尺。八。寸。高。一。丈。五。寸。云。く。と。云。り。今。室。生。山。麓。よ。何。ゆ。と。書
ども。ふ。云。り。○。上。件。三。柱。の。中。ふ。山。神。に。成。坐。る。ふ。就。て。考。る。ふ。

火神の御體也。まきもはと天上ふ上越て山とあむ。大山
津見神ハ。其ふ因て生坐ると知られとめ。其山を天之香
山とめ。迦具土神也。御體の化まる山とゆ故ふ。香山とは
云れ。ゆ。る。岩。屋。戸。段。了。彼。山。と。ゆ。招。禱。奉。也。の。品。を。取。れ
ふ。云。る。を。け。て。山。の。始。也。は。火。神。に。御。體。の。化。ま。る。謂。ふ。因
見るべし。ける山の始也。は。火神に御體の化まる謂ふ因
て。諸高山の頂とめ。火に燃るあらむ。外國人此説。高き
有るが故ぞ。あど。事も。あげ。云。れ。ど。其。や。ぐ。て。火。と。土
と。和。合。ふ。間。に。成。出。る。物。の。一。種。あ。ま。む。此。の。謂。は。依。る。あ
る。ま。と。○。上。件。文。の。趣。ふ。て。は。大。山。津。見。神。ハ。雷。神。と。ゆ。後
ふ。御。名。の。出。る。を。以。て。後。ま。て。次。ふ。成。坐。る。ま。と。聞。ゆ。ま
ぎ。も。此。三。柱。の。成。坐。る。は。み。あ。同。時。よ。て。其。中。ふ。山。神。ハ。

中段ふ成坐るふはぬし。けるは其御體の香山と爲れる
よとは論ひれく。文此趣ふても御名こそ次ふ出給ふま。
此神を中ふ上首と坐はしむ。と思はぬ。状も見ゆる
まや斯て雷神靈神をもふ。山も住む神あるも。此謂ふ因
まとあるばく。はと靈神の龍此類乃祖ふて。其を統領と
はふ事ハ更ふも云を。雷神を謂ゆる雷獸の祖神ふて。
其字統領ゆ給ひ。雷獸と云を漢語を依を。此方よてハ。処
ヅチとも云ふ。又サ、山津見神は鹿の祖神ふ坐して。
其を統領と給ふま。思ふ由あ。抑か。依事をけり
ふ言ふをば。人を然こそ言過とるま。思ふれれど。其

れ布いまど。漢意の除あらぬもれぞ。龍の類此祖あるこ
とハ。上よ引る。景行天皇。卷ふ記せる故事ふて。更ふ論れ
きを。彼雷獸をしも。予いと弱くて。秋田も居とゆし。布ど
ふ親しく見ぬる。大さ狸むりて。毛を彼獸とゆし。長
く。や。黒き物あり。往し寛政元年。ありし。五月頃。い
あ。く。夕立して。神鳴りた。き。神降あて。間もあ。く。晴と
巴し。後ふ。予が。従弟ある者。の庭。此。築山の。木と。ゆ。ふ。蟻を
喰ひて。居と。巴し。う。バ。此。を。雷獸。よ。と。て。立。さ。己。龍。棒。よ。槍。を
よ。と。手。お。と。ふ。持。て。事。も。あ。く。打。殺。し。ま。り。然。る。も。從。弟。
グ。家。を。予。が。家。と。を。二。十。町。許。も。隔。ま。く。ば。知。ら。で。有。し。を。
二。日。ぞ。の。巴。有。て。其。事。を。知。て。往。て。見。る。ふ。彼。獸。を。若
き。人。く。う。ち。集。ひ。て。早。く。喰。竟。る。多。く。皮。と。頭。を。残。し。置
ぬ。さ。て。味。ひ。ハ。麻。美。狸。と。云。物。の。如。く。ふ。て。い。と。美。う。巴。し。
あ。ど。云。う。甚。不。い。あ。く。む。有。る。の。く。ふ。て。い。と。美。う。巴。し。
地。内。ふ。降。居。と。巴。し。字。此。を。投。網。て。ふ。物。を。打。う。け。ま。或。人
よ。あ。と。め。し。う。ば。其。時。た。の。ま。よ。く。見。ぬ。る。あ。り。さ。て。其。を
驚。の。竹。屋。ふ。入。ま。て。養。お。き。け。依。ふ。常。ハ。狸。外。ど。を。畜。と。ら
む。や。う。よ。て。さ。し。も。猛。く。ハ。あ。ら。ぬ。獸。を。空。の。陰。ま。る
ど。き。を。勢。気。け。ら。ふ。常。と。を。別。ふ。し。て。竹。屋。を。破。也。も。矣。と

き状ある故に其屋の上ふ石おど置て破らせしと構牙
おるふ一日太く夕立してかき陰れる時ふ遂ふ竹屋
を打破りて雲ふ飛入り去るが即鳴るとよみおるハ其
の何ら燃うさて此獸常在山に住て其山辺人の言をき
くふ此の多ある処ハ神の鳴ると繁うる故ふ雷獸獵と
云ことを為れぬ神は鳴ると少くとぞ此等を以て按
ふよ彼ハ雷神の御末了て此了成坐る雷神を其御祖
坐して彼獸を掌給ふ状を思ひおさゆふ非也や彼海
神の鱔此祖も坐坐おどを思ふるし猶下ふハ俣大蛇の
尸此雷とおれる処合せ考ふは第七十段傳を見と
けて彼雷獸と云獸はしも雲ふ乘て鳴はさあくれど信
ふ神おれども人ふ制せらるるばの正常ハ卑死物ある
は甚く奇異たよ就てれ本思ふふ雷神の用ひ給ふよ依
てぞ彼を神おは所爲の何はよて實ハ彼が神おはふは
非ぢゆれ也其ハ鳴神はをくくはしふ処字探バ交神
降して石を碎木を振おどを心おくて為

以事のぶと凡人を思ひ居れど世のあは人此為善
らぬ物を別了え正て撃ひしぎまに神功皇后の迹驚岡
を掘し炎給ふ時大石の塞りて穿得ざりしを大后此
神お祈り給ひしうば霹靂して其磐を齧裂きて水を通
たさる類の事此多うるあどこれら人お煮て喰ハる
ばの正此獸は為し得るき事あらぬや雷神の其元を掌
給ふが故に加ふるさゆを凡人も神お誘をきて幽冥ふ
功をれ虫ぞうし入也やのて其神お使はゆ時を常ふ變也靈異ある
事残も爲ゆ由あ也おを慥ある事実を聞持但し此を人
ふ限らぬ凡ての鳥獸も必然なほし殊ふ此雷獸と云ふ
近き物けて神降おおる事實をおらく按ふゆよ其善
字也ら燃物を撃給ふはさゆ事ある哉時とあては然も何ら
燃物の撃ゆ事もあるハ凡人は少き智もて加ふかく

ふ測、知らざる。際ふ何ら祿と。是ぞ神の功也。弘く大なり。所よて。然る細し。死撰びなく。御稜威を震ひ給ふはし。稀ふ。然る事此有て。物ふはま。人ふまれ。謂ゆる運何となく。偶その御稜威ふ觸る。うぞ有る。依。其を天、日の照まれば。おまほく。其照日。傷たれて。死する。物も有ると同じ。然れば。何ぞと善人と云。牙ぞも。あま。く。然る。あやふ逢むも。測也。が。あ。死。わ。ざ。あ。れ。む。一。向。ふ。その御稜威の畏死を。畏はめて。在。よ。り。外。ハ。形。支。事。も。れ。む。斯。て。彼。甚。く。怒。り。て。死し。人。の。神。魂。と。あ。り。ふ。は。此。の。謂。ふ。依。て。雷。神。と。共。ふ。稜。威。速。ぶ。る。功。を。爲。し。ふ。て。其。を。彼。獸。を。用。ひ。お。く。勢。を。顯。は。る。

ぞ有る。ば。き。然。ら。ば。彼。荒。ぶ。る。事。の。有。る。も。ち。て。雷。神。の。世。間。ふ。功。を。爲。し。給。ふ。跡。を。お。ら。く。考。は。ふ。人。の。思。畏。む。は。然。る。も。の。ふ。て。禽。獸。蟲。の。類。も。恐。れ。惑。ひ。ま。と。世。ふ。惡。死。病。を。流。行。さ。る。妖。鬼。も。甚。く。怖。は。く。げ。ふ。て。其。病。此。や。は。ま。る。れ。ど。い。ぢ。も。畏。く。奇。異。れ。あ。そ。其。ハ。彼。疱。瘡。あ。ど。を。煩。ひ。直。し。石。瘡。と。り。云。ふ。あ。り。て。事。故。あ。く。ひ。ど。つ。雷。鳴。あ。れ。バ。あ。ど。ハ。は。く。見。お。る。事。れ。ま。バ。如。此。を。云。ぞ。因。生。坐。る。大。神。の。御。怒。り。火。神。の。御。怒。り。と。因。て。成。坐。る。神。の。御。稜。威。を。い。の。ふ。太。じ。死。物。あ。ら。び。や。此。神。の。御。稜。威。を。か。く。世。よ。及。施。ら。し。給。ふ。故。ふ。あ。そ。百。足。の。比。禮。蛇。此。比。禮。を。も。用。ふ。依。あ。と。無。き。世。と。は。有。あ。れ。あ。は。比。禮。ど。も。の。事。ハ。第。八。十。三。段。の。傳。ふ。注。べ。し。然。る。御。

徳をば思ひ通さず。あぐふ荒ぶる神れおと嫌ひ思ふぞ。
凡人の習はあむは。道は志さむ人を。此理をよく思ひ
き事とぞ思ひ奉らゆ。○一傳云。此を古事記ふ採て記せ。正鹿山津
見神。名義師を口訣ふ眞坂あむ。と云はれ。從られおまど。
其義ふを非じとぞ思ふ。其由下ふ。○於滕山津見神。師云。
於滕ハ下處の意。今も下る處を。於理斗と云あむ。はて
かくはまよ活くら。ルレ。は。省く例多し。○奥山津見神。
奥山を聞えとる儘れ。○陰ハ袁婆世と訓はし。師を富
れおまど。火神を男神も坐む。此詞いりおぞやおも。○闇山津見神。師云。闇とは谷
の事れ。○志藝山津見神。師云。志藝山ハ繁山あるを。

○羽山津見神。師云。羽山を端山の意と云説とろし。又葉
山ふても有はし。青葉山を云おも。○原山津見神。
師云。原山を字の如けむ。○戸山津見神。師云。戸山を奥山
ふ對ひて。外山此意あるはし。と有。御紀の亦一書ハ
祇もあれ。此傳委れふ似とれども。雷神と靈神の生坐
は事れあむ。却めて粗き傳あり。按ふ。かく種く此
山津見の名あると。大山祇神の御靈の。次くふ分
て。其處くを持分坐む。かくる傳。此出來しおぞ有べ
れ。さて此傳ふ。まお始。ふ生坐る。正鹿山津見神と云名の
正鹿を。正字よて。此を決く。大山祇神。此御靈ふ因て成れ

依。鹿神あるはく所思と也。高麗神を龍神。大雷神を雷獸
 思ひ合。其を信友も既く。加具土の香山ふ通ひ。正鹿の眞
 名鹿ふ通ひて聞ゆるは。由る也。と云也。しハ然る
 言よて。彼此思ひ合はる事ども此多う依を。其を下ふ
 次く言を見て知はし。第四十五段眞名鹿の処まよ第百
 十三段天之迦具神此処を合せ考
 ふべ

七十

故其大山積神。亦云大山。罪御祖命。亦名
 大水。上神。亦云大水。上御祖命。亦
 大水上神。亦云大水。上御祖命。亦

三十八ヤマイカヅチノカミ。コノカミノミコヲマラスタカミナカミノ
 名山雷神。此神出子。謂高水上

カミト。マタマラスタカ。コノオホヤマツミノカミト。トヌ
 神。亦云高。此大山津見神。與野

ズチノカミ。フタバシラヨリテヤマヌニモチワケテ。ナレマセル
 椎神二柱。因山野持別而。生坐

カミノミナハアメノサ。ズチノカミツギニクニノサ
 神出名。天出狹土神。次囿出狹

ツチノカミツギニアメノサ。ギリノカミツギニクニノサ
 土神。次天出狹霧神。次囿出狹

霧神次天出閭戸神次因出閭

戸神次大戸惑子神次大戸惑

女神凡八神矣。

大山罪御祖命御祖也。種々の山祇神也御祖。と云意ある
也。其の神産巢日御祖命大土
上御祖命此ら大山祇神の亦名あると此證也。此御名
也。延曆儀式帳に見えて式も度會郡大水神社とある

社を大水神社一処。稱大山罪御祖命形無倭姫内親王定
依きよ。やあるふて大水神と云ひ。大水上神を云む。大
山祇神あると知れとす。此神を御祖命と云こと
此神を大水上を稱はるとは。ま於四時祭式廣瀬大忌祭
條ふ。是日以御縣六座山口十四座合祭と見え。この山口
申は。前段ふ奉とる山口。祝詞式も廣瀬大忌祭祝詞の
次よ。これ十四座の山口神社よ白ひ祝詞を記す。其文も。
倭因能六御縣乃山口爾坐皇神等前爾母。前件引とる
宮材を採るよおきて祭る詞あり。皇御孫命能宇豆乃幣
乎云。を今も省きて引きつ。如此奉者皇神等乃敷

坐須山マスヤマ乃自口ノチヨリ狹久那多利爾サククナダリニ下賜水乎タガシタミツヲ。考云久那の逆約
垂を延て佐久那陀理と云ゆ大祓詞高山之末短山之
未与利佐久那太理尔落多岐都速川之瀬坐云くと云る
小同コトヲ甘水登受而ウケテ。令の大忌祭の義解み欲令山谷水変成
意イハレ亦モ同ト天下乃公民乃取作禮留奥都御歳乎惡風荒水爾
不相賜汝命乃成幸波閑賜者初穗者云く。あく小奉物の
省シマ如横山打積置氏奉牟登云く。此小御前ミマ集ひて
を今イマ省シマ諸參出來シヨクマデキ氏皇神前爾宇事物頸根築拔氏朝日
乃豐榮登爾稱辭竟奉久止宣と有を見れむ山神を山を
知看して其山くの口と也。佐久那太理爾落下し給ふ水
を田小受て穀物を取作る故ふ山を水の水上と云意を

以て其功を稱タテマ了て大水オホミナカミ上神ノカミま大水神とハ申スあゆけ
也ナリばと大水上御祖命とも申ス以事也。大山祇御祖命と申
也ナリ同く殊ヘテ了稱了とる御名あるべし。神名式カミナマシキふ伊勢国度
會郡大水神社。此社コノイハを今宇治郷畑村と云よ在と帳考小
何れど一本小大水の二字あり其正ただき本あり。田上大水
此考へ垂仁天皇卷二十五年の処トコロ注べし。田上大水
神社。此社コノイハを今継橋郷宮崎と云處トコロ在と帳考ト云也。下
小由コトある事。石見国イハ瀬摩郡水上神社。此社コノイハの六と七
と所思オモヒ也。十四段大山咋神の
処トコロ委ツカく讚岐国三野郡大水ミツノノ上神社。此社コノイハを清和天皇紀
云べし。貞觀七年十月九日授正五位下。同十七年五月二十七日。
授大水ミツノ上天神五五位上と見えとゆ。いま神田の別れ村
羽方村と云ふ処トコロ也。

一、宮二、宮三、宮おと云社ありて、其二、宮あり、おれお並び
と云傳ふ、其、辺、五村の氏神也と、帳考ふ云也。されお並び
て、鄰郡大内郡お、水主神、社、何也。是も同神あるべし。此社
は、仁明天皇、紀承和三年十一月壬申、奉、授、從五位下、清和
天皇、紀、貞觀八年四月九日、授、從五位上、と、何也。今、水主村
て、別當を大水寺と云、長寛■年、賴業、勘文、了、當社、昇、正五
位、と、何也、と、帳考ふ云也、大水寺と、云、別當寺、ある、ふ、て、も、
大水、神、ある、こと、を、知られ、たり、ま、と、山城、固、久、世、郡、よ、を、
水主、神、社、何、れ、ぞ、別神、あり、其、を、第、四、十、六、段、火、明、命、の、処
よ、云、
○山雷神、山神の生坐る所以を、前件お見えとる如
く、伊邪那岐、大神、也、御怒、坐して、斬給へる。火神の御體お
成坐せしうば、猛く、剛く、坐ひ、こと、知、ば、し、故、雷と云稱字
負給ひらむのし。此雷を、豆、知、ま、と、都、美、と、訓、を、非、あり、但
し、某、雷、と、う、ける、例、を、思、ふ、お、神、武、天、皇

紀お、嚴、香、來、雷、嚴、山、雷、武、甕、雷、神、お、ど、見、え、と、り、此、う、ち、香
來、雷、山、雷、二、の、雷、字、を、イ、カ、ツ、チ、を、も、訓、べ、ら、れ、ど、武、甕、雷
の、雷、を、イ、カ、ツ、チ、と、は、訓、ら、さ、ら、れ、ど、此、を、例、を、し、て、何、れ
も、豆、知、と、訓、べ、き、う、さ、ま、ど、此、処、ハ、必、山、伊、加、豆、知、ある、は
く、思、お、れ、む、上、の、如、く、ハ、○高水上、神、名、義、大水上の、大お
訓、み、お、猶、よ、く、考、ふ、べ、し、○高水上、神、名、義、大水上の、大お
對、お、了、高、と、を、稱、お、し、れ、ら、む、延、曆、儀、式、帳、お、坂、手、神、社、稱、
大水上、兒、高水上、形、石、坐、倭、姫、内、親、王、定、祝、と、何、ゆ、小、社、神、
社、大水上、兒、高水上、命、形、石、坐、古、曾、を、訓、て、佐、く、津、比、古、命
二、座、と、新、川、神、社、大水上、神、兒、高水上、命、形、石、坐、新、川、姫、命
と、い、石、井、神、社、大水上、神、兒、高水上、命、形、石、坐、宇、治、乃、奴、鬼、神
社、大水上、御、兒、高水上、形、石、坐、お、ど、見、え、る、也、此、餘、お、も、大
云、神、多、く、儀、式、了、見、え、と、れ、ど、た、お、お、り、れ、き、事、ど、も、何、れ
む、此、よ、奉、お、そ、ハ、垂、仁、天、皇、卷、傳、お、論、へ、る、を、見、る、べ、し、

けて此神の事蹟を世記ふ。倭姫命。大御神の宮地を求めて。度會郡ふ至坐る時の事を記せる處ふ。高水神。言を省けるを大水の上を大水言を省と稱す同るを。參相支。汝因名何問給。白久。岳高田言を省淡坂手因止白天田上御田進支。其處仁坂手社定給支とあ也。此を甚く時代違へるふ似とれども。此宮地求の時は。某く小鎮坐る神等のみあ現人神を現はま末して御田進也。はと御饗れと獻られしうば。此神も現れて御田進らあ也。此等の事委く垂仁天皇卷ふ云ふを。かくて此功ふよ也。坂手社を祝定給ひらむかし。儀式ふ倭姫内親王定けて其社は式ふ。度會郡坂手因生神社とある是あるべし。社

は田辺村荒木田氏社の北方の小塩崎と云池の辺にあり。坂手は此辺の古名ある由いひ傳ふを。帳考ふ云り。刃布大山津見神乃御子也。いせ多加也。其を下ふ次。○因山野。山野を師説ふ。常ふを怒夜麻と訓。夜麻怒と訓べし。下の河海のや何也。けて因とは山神ハ山ふ倚坐し。野神は野ふ因坐て刃ゆ。○持別而生坐とは。此神とちれ。凡の上を云るふて。二柱神。山と野とふ別くふ生み坐るとふは非也。その持別て坐る二柱の産靈は御間ふ生坐るを此事あ也。まよ御合ませる由ふも。○天之狹土神。因之狹土神。本書よ訓土云豆知と何れ。名義師説ふ。狹を志那の切ま也。ある言ふて。其志那ハ級了て。坂路の古とれ也。其由

て師の冠辞考志れてゐる。其を佐せ此み云ふ例也。應神
天皇卷の大御歌ふ。九邇坂字。和邇佐と有り。坂と云も。加
は處也。意ふて。何れも是れ也。級處也。豆也。例の助辭。
知を尊稱よむ。野豆知の如く。坂豆知也。今云御紀ふ。天
國常立等の次ふ。國狹槌等と有り。や何也。然れ也。此二柱
也。山此坂處を掌る神も坐せ也。○天之狹霧神。國之狹霧
神。名義狹也。狹土の狹と異ふして。眞も通ふ佐也。佐霧
てふ言の意ハ。上風神。此處も云ふが如し。はて坂處も居て。霧を發る神也。
信し。師説と異あり。○天之閻戸神。國之閻戸神。名義師説
ふ。久良は谷也。少くも多くも。水也。落るを云。此こと也。師
借字也。大祓詞。高山末短。

山之末與理。佐久那太理爾。落多支都速川能云。去れ谷
川の水也。落來る狀も。佐也。眞も通ふ言。久那ハ久良も
通ひて。谷也。少くも多くも。水也。落るを云。此こと也。師
て思ふ。多理也。少くも多くも。水也。落るを云。此こと也。師
走垂水の谷と云名母も。此多理の轉まるる也。依る也。万
葉十七も。鶯也。久良多爾と詠也。地名也。非也。かの久
那太理と通ひて。谷也。谷也。谷也。谷也。谷也。谷也。谷也。
處ある故。は。諸國も。某倉倉某と云地名也。多う也。谷
と。出たらしむ。戸は處也。有也。上件。天之狹土
神より次く。皆天之國之と云は。師も。二柱並坐神の
名を對して。稱とるまで。

みて、天と因とみ異なる意を
 有べうらびを云まかれど、**天之御柱命、因之御柱命**此
女男ふ坐マカにカふ準へて按ふ。此なる神とちも、女男二柱
 ぢく生坐しけむらし。○大戸惑子神、大戸惑女神。本書よ、訓惑云、
麻刀比とあれど、トを清て唱ふべし、惑を今ハ名、義戸は
トドヒを濁りて云子ども古を清てぞ云ハむ。
 處惑ハ字の意ふて、此神を、谷處クラドふ居て、霧を發タツは神ハ依
 を霧キリあむれど、惑はしう依とカ。如此名を負せあるれら
合せ考ふるし。狭土神ハふ狭霧神を屬ツけ、閻戸神トふ戸惑
 子コ戸惑女神を屬ツけ、引合せて此神あちを、坂處サカドと谷處クラドと
 小居て、霧字發タツる神とちれる事を悟るべし。○師云、凡て
いと易らうふて、事もれき物うら、千歳の後此世ふ其の
解おせむいと難き、已ばふあむ有なる、其故は、と改抄の

詞を、その躰も意も、世々ト移轉て、いぬく変マじき燃る事
 あるふ、然る流の末と、り、遙トふる源マうカふ業ノあれど、
 その間、いく瀬セ比ヒ不フど、り、隔マと、り、燃マらムむナ、何ナニうウ容ヨ易ヨハ
 心得らるべき、彼、狭土の狭を、坂サカぞと云イ、如きも、坂サカて、ふ
 言ふ、此コノみ耳ミミあアまマ、於オる流リ比ヒ末マの、人ヒト、心ココロふフ、甚シを物モノ遠トくて、
 信シらラまマ、燃マあアとト思シ、免マゆユ、こコを古コノ学ガクをヲよくクして、川カハの八ヤチ
 隈サカイを經スの、がガりて、源マよヨ至シり見ミむ時トキぞ、然シカこコを、は、覚サトぬ
 き、然シカるルもの、を代カく、此コノ学ガク者ノ等ノの、書シヤク紀キの、神カミ名ナあアどを、説トク
 とトるル、後ノチ此コノ世ヨに、心ココロ詞ノを以テて、直タふ當トる故ユ、こコをモ無
 く、今イマ、人ヒトの、耳ミミふフ、を安ヤスらラうウ、聞クも免マまマど、源マよヨ游ユりて見ミれ
 ば、皆みな非ヒぬヌ、あアとトよヨて、○此處ココよヨ少シの、天神地祇の、因土インツチふ幸サイ
 中ナカく、小物遠コモノトウくあアむ、○此處ココよヨ少シの、天神地祇の、因土インツチふ幸サイ
 給ふ御徳を、諭サシてむムせセ、其ソノは上ウヘふ言コト、如く、伊邪那岐、伊
 邪那美二柱、大御神、天皇祖命、此大詔命を受給ひて、その
 爲給ふ事ごとふ、因土インツチの、あア、青人草の爲と、此御所ミヤノ爲ニあ
 ら燃マむ無ム、此コノと上ウヘよ、を、そ、此コノ生坐マカる御子神と

ち。此は彼の謂ふ依て生坐し。彼を此謂ふ依て生坐ると。其生坐る謂こそ。各々異あれども。凡て二柱神の。国土を成し堅免て。青人草を愛み給むの大御心よ。生成し給ふる亦依故。其神とち此。今此現ふ。国土青人草ふ幸ひ給ふ。御功德の蹟を免て。於らくよ。察もて行なは。はと此御謂ふ。少くも違ふこと無し。其を近く譬をと。て言はぐ。稻種を田ふ殖るを。天於日此蒸生は。彼火神の。埴山毘賣神ふ御合坐して。稚産靈神の生坐ると。全く同理して。火神土神水の御靈ふ因る亦。斯て山山此口よ。佐久那太理ふ落來る水を。甘水と受て。風そ

と地於登らに。おまは。山神風神此御靈ふと依を。火の土を照入ることの烈々まむ。惡虫も多く生出て。稻も枯れむと。ゆる哉。其烈く照入る火氣ふ蒸さまて。山ふ含免。依水の。天此狭霧と發升て。雨と降るは。おま山神土神。水神此幸子給ふ所あり。但し此を密分て云々。霧ふ多ちおて。其を降らし。給ふ神。此段ふ成坐る神。水分神。久比耆母智神の掌給多御事あり。けて如此。火氣と水氣と互ふ争ふは。しふ。雷神のたぎ。け。鳴。出て。霧神の水雨を。け。降し給ひ。万葉ふ。我。崗の。霧。雪の。撒けし。そ。あふ。ちり。ら。む。人。去ら。よ。た。び。え。魂。ぎ。依。む。加。て。ふ。畏。免。は。況。て。虫。あ。ど。は。深。く。穴。了。隠。れ。死。も。免。免。也。け。て。天。霧。ひ

ぞ。云もて行なば。元々火神を生坐る事と正起れる事れ
は。た。いと。も。靈。妙。ある。事。れ。ら。げ。也。お。本。次。く。ふ。云。ふ。
多。見。て。曉。る。様。し。

於是伊邪那岐命欲相見其妹

伊邪那美命而追往豫母都圀

矣故其伊邪那美命自殿騰戸

出向出時伊邪那岐命語詔出

愛出吾那邇妹命悲思汝出故

來吾與汝所作出圀未作竟故

可還詔矣爾伊邪那美命答白

悔哉不速來而吾已爲豫母都

戸喫。雖然愛出吾那勢命入來

マセルコトカレコケレバナムヲカヘリレバクトヨモツ
坐出事恐故欲還且與豫母都

カミアゲツラハムウカラヤナミタヒソトアヲマヲレテカヘリイリマエ
神相論族也莫視我白而還入

ソノトノヌチニホドイトロサシクテマチカネタマヒキカレ
其殿内出間甚久而難待矣故

サセルヒダリノミミヅラニユツツマダレノ
刺左出御美豆良湯津杺櫛出

ヲバレラヒトツトリカキテトモヒテヒトツボイリミマス
男柱一箇取闕而燭一火入見

トキニウジタカレトロ、ギテ
出時宇士多加禮斗呂呂岐而

ヤツノイカツチソヒヲリキ
八雷公副居矣。

欲相見相を師云逢の意小見ばし。○豫母都國ハ上小下

津國とある國此とよて。即夜見國を云ふ。然るを豫母

豫母都醜女豫母都平坂れど云。名義ハ字の如く夜見を

例ふて都を之よ通ふ助辞あり。其此國ハ大地の根底小成也。此事ハ第三段

小隔られて天光を受ざる國ある故小暗く也。このば。

如此は云ふ也。下文よ燭一火と。○追往師云往を伊傳麻

志と訓ばし。凡て行給ふことを古言小伊傳坐と云ふ。故
行幸をも古くは伊傳麻志と云ふ。此語本々出る意ふ云
ゑる小母有るれど必は冠でもあぐ行賜ふも來賜と
云うも云ふ。今の俗語も御出あさゆと云を、行こまふ
も來ことよ母用ふるを同じ心ば有る。
○殿騰戸。おは登能く阿宜度と訓べし。伊邪那美大神の
住給ふ御屋の戸也。騰戸を云ふ。下と上を引上ゆ戸
を云ぬるべし。今も有るもれあふ。師説ふ。崇神卷歌ふ。彌和
能等能度と有る。三輪之殿戸あり。此小依て登能度と訓ばし。と
云まこれぞ。けては騰字無用あり。但し眞福寺本ふを騰
ミドれど訓ばき。○汝字。師云。前ふを那と訓ばまき。此は
ふや。猶考ふべし。

美麻斯と訓むばし。元正紀宣命ふ。美麻斯乃父止坐天皇
乃美麻斯爾賜志天下之業止云く。美麻斯親王乃齒乃弱
爾云く。吾子美麻斯爾云く。此美麻斯を聖武天皇を指
て元正天皇の詔へるあり。光
仁紀ふ。美麻之大臣。光仁天皇の詔へるれり。おど有る
尔依れ也。けて言義ハ御坐り。今も尊びては御所御前外
ぞ云ふ。いは若くは御身しふて。○所作之圀を所生之
圀と云むが如し。其は生を成とも云ひ。成を作るとも云
ふ。あふ。○未作竟故とは師言ふ。下よ大名牟遲與少毘
古那。二柱神相竝而作堅此圀。あるふことある。是今妹妹
神の未作竟とまをぬ所ある故あふ。相照して見ばし。と

何也。はて妹妹二柱神の因作、給する事實ハ。物不見えざれども。尾張風土記。因造坐大神と見え。出雲風土記。神門郡古志郷の處。伊弉那美命之時。以日淵河築造池。也。あるを思ふは。只生給する此みあら。作堅も爲給。予依あ。其池を造る。おと。潮よま。水ふま。彼此。の本とり。ふて。はと。早魃の。○可還詔矣。師云。麻世の世を。延て。佐泥と云は。古言此常の格あり。○悔哉不速來而師。云。哉字書紀。伽夜神武。也。も。柯佞。也。も。注せれども。れ不加母と云ぞ常ある。如那と云こと。奈良。はて此。既豫母都戸喫し給。予依あ。と。我悔給。予依御言あ。○

豫母都戸喫師説ふ。問とは即竈のあ。とあり。戸字書ハ。竈を本ふて。民戸をも然云故あり。漢因ふて。民家を戸と。家を問と云よ。此字を用。あり。さて竈を以て。民家をよ。ふ。こ。今。世の言。ふ。も。幾竈と云。ま。と。竈。絶。る。あ。と。も。云。免。り。ま。と。民。戸。幾。烟。は。て。豫。母。都。戸。喫。と。は。夜。見。因。の。竈。ふ。て。煮。炊。と。る。物。を。食。を。云。は。是。れ。む。火。を。忌。清。む。る。事。此。本。れ。に。依。火。何。也。曰。火。雖。是。淨。因。物。而。穢。故。不。食。炊。爨。之。物。而。已。と。ある。水。火。ハ。天。生。の。物。あ。れ。バ。穢。あ。し。と。云。た。安。ふ。理。を。の。み。思。ふ。漢。意。あり。も。し。物。ふ。因。て。穢。と。せ。ば。夜。見。の。物。を。炊。爨。の。具。に。限。ら。ば。摠。て。穢。れ。と。る。故。を。取。分。て。竈。字。し。も。云。た。も。と。其。火。ふ。穢。の。有。る。故。を。ら。ぶ。や。後。子。男。神。此。御。身。に。著。る。御。衣。服。あ。ど。穢。し。と。て。投。棄。と。る。ふ。た。夜。見。の。凡。て。此。穢。あり。然。る。ふ。今。此。ふ。た。他。の。物。を。此。る。ま。い。や。し。て。唯。戸。喫。字。し。も。詔。ふ。た。火。の。穢。此。重。き。故。あり。さ。て。火。ふ。淨。と。穢。と。が。ある。こ。と。は。如。何。あ。る。所。以。と。も。測。に。知。

をきりて、何らぬを、其理おしと思ふ。ハ、神の御言を信じて、
あて、安んぶ己の心を信むものあり。今世了て、神事此時、ま
と神の坐地おどふこそ、火を忌こと有免れど、おぼて世
間ふえ、然るに、げもせぬを、火に穢を云ハ、愚れるおせし。
さかしら、のる漢意の弘これるお也。今云、上ふ云、る如く、
御祖神の生給へる處、去てふ二種ふて、其やぶて清きと
穢きと、異なる状、見ゆ。依上、何れかし。方、此禍を、火の
穢、依くから起るぞかし。神道ふ志さむ人、由おき漢意
を捨て、とく此を思ふ。ば、たおせぞ。かく、まバ民を撫て、世
戎治むるを。先天下の火を忌、清絶て、神の御心を取奉る
べきものぞ。げて今此、ふ如此、申し給ふを。族離のぬれ御
心は坐、依して、はと此、因土、ふ還、坐、ま、おしくは思ふ。し、食
ものから、此、豫母都戸、喫の穢、よ、因りて、還、坐、去、こと、不能

依よし。れ也。此御言をよく味ひて、何れおし。火の穢を
取布ぎ也。ふれ思ひおし。と有也。此を、実ふ。然る説あり。
ちて此神を。あ、夜見、因を、忌、惡み、給ふ故。彼、因、ふ、屬る
事物をば、返遣てむ。失ひてむと。稜威速、ひ給ふ御靈の盛、
れ、依て。石屋戸、段ふ。万、おの物を。此神の御體、化、れ
る。香山、と、ゆ、取れるお也。其を、彼、度、此、神事ハ、夜見、因、よ、也
起れる禍を、返遣也。失はむと、はるの事、お、し、か、む、れ、ゆ。
委くを、彼、處、
ふ云、を、し。○雖然ハ、豫母都戸、喫して、還、坐、の、と、れ、御身、
上とお、也、坐、ゆ。然れども、云、む、が、如し。本を、然、字、のみ、お、
依りて、雖、字、
を、加、と、也。○恐故を、俗、ふ、難、有、勿、體、お、け、ま、バ、お、ど、云、意

ば予ふて。吾は豫母都戸喫して。歸ガ多死身れ。のらも。汝
妹命の御自身歸坐せとて。入來坐る事の恐けまば。とれ
也。○欲還師云。此衰てふ助辭也。古歌を多く知れらむ人
は。自ら味ひ知れし。と云ま多依が如し。○且字は。斯婆良
久と訓ぶし。其在豫母都神と相論ふ間を。姑く待て。我を
視給ふれとあり。下文ふ。甚久而難待矣。と。○豫母都神也。
如何ある神と云ふと。御名の無れむ。知れむ由あるまど。
既に此因の成初し時。因之底立神。豐斟淳神の成坐し
おまむ。此因ふ元とゆ神の坐ましける。其初を詳あり。け
て下ふ伊邪那美神を。豫母都大神と申はよし見えとれ

ば。此神の大神と爲せ給はざせし布どを。此子見えある
豫母都神ぞ。大神を坐はしむ。故此神と相論ハむ。と
は宣へるふ依るし。○相論師云。阿宜ハ言舉の如し。都良
布ハ引おらふ。挂おらふれどの類ふて。其貌を云辭あり。
今云。相字ふ。けて此也。上因ふ歸坐むとひるまとを。相議
あまふを云お依るし。○莫視吾ハ。夜見因の實は御有狀
此見苦さ字。男神ふ見せ給はじとてあり。其ハ下文ふ。宇
呂岐而とある。然在バまの出迎坐依時ハ。夜見の實は御
貌を思ふべし。○殿内ハ。師云。登能奴知と訓ぶし。
貌字製ひて。元の御貌ふて相見坐るあり。其ハ下文ふ。そ
を御覽して。男神此始。○殿内ハ。師云。登能奴知と訓ぶし。
て畏まあしを思ふべし。

神功皇后紀の哥よ、腹内を波瀾濃知と詠
み、万葉ふ、囀内を久奴知と訓る例あり。○間ハ。師云。阿
陀と云むも悪。富柿と訓はし。然訓る例。万葉十一ふ有り。
○甚久而甚。師云。伊登と万葉ふ訓。言ふも甚字とく
叶へり。最字。せ云れき。けて此を。上ふ且云くと有依と。挂
を當らば。合る語あり。○難待矣。師言ふ。待り祿を云語。万葉ふ多し。
加禰ふも多く不得と書。凡て迦泥と云む。みあ此不得
るを云ふ。俗よ云と。難字も意は通ず。まよ語も加
いけく。難を直ふ。有り。けて此を前ふ。且詔るふ
ども。此の難を直ふ。合せては。甚久。あたふ待り。給ハざ。しれ。○御美豆
良。此を御紀ふ。正字あり。師云。美豆良は。上代ふ。

男此御装よて。髪を左右分て。結縮するものあり。下ふ
天照大御神の解御髪而纏御髪とるふ。とあるも。息長足
比賣命此。檀日浦ふして。御髪を解して。海入洗あるひ
て占あるふよ。御髪自分とる哉。即その分まするまふ
結て。御髪と爲る。未ふ事何依も。假ふ男貌と爲給ふれ。正。
はと崇峻天皇。卷ふ。古俗年少兒。年十五六間。束髪於額。十
七八間。分爲角子。今亦然之。とある。此角子即美豆良あり。
十七八間とあるを。後の事あるべし。いと上代ハ。凡
て男を然せし。と右よ云。如し。○角子を何げま。たと
訓るハ。後の称あり。万葉七ふ。角髪とあり。左右ふ有依。が
即み。おらと訓を。方葉七ふ。角髪とあり。左右ふ有依。が
角の如くある故ふ。か。依稱を有あり。後世。美豆良。と云
ふ。此。美豆良。と云

訛れる言あり。江次第ふ幼
主之時垂鬢類ともあり。扱う此大御神の御装の所を
以て見まば。美豆良ふも珠を飾りしあり。万葉二十ふ。阿
母とじも玉
もぐもやいふきて。美豆
良の中ふ何牙まうまくも。○湯津爪櫛を。湯津を。五百箇
此約れる爪也。第十五段ふ。師説を
引て注せるが如し。爪は。師云借字ふて。加
都麻の上を畧けるあり。加都麻は堅津間ふて。多都を切
むれは都
櫛此齒の志ぐくて。間の堅くせまれる哉云也。元間勝
間。小船乃勝間も。此意ありとあり。按ふふ。爪を。都麻理て
ふ言の理此省也。さるふて。櫛の齒此志げくて。間の迫れ
依を云あるは。又もしくた。爪を正字ふて。齒櫛ハ。師云。
本串と同名あり。火を燭し賜ふを思ふ。上代の櫛此齒

は。やく長か也。しのば。串と同類ぞかし。○男柱を。師云紀
小雄柱を何れ。古れをホトリ。バと訓るハ。辺齒此意よて。
中古の称あるべし。二記共。柱とあれむ。
古言を。然らじ。共ふ袁婆斯羅と訓る。字鏡小。幢柄。橋梁之左右
之柱乎。止古柱と何也。大神宮年中行事よ。東。男柱。西。砌云
云。あれむ。御殿の高欄此男柱とて。
字鏡よ云是ふ準ふまば。櫛も左右此端は。大なる齒を。男
柱を云けむ。はて此を取闕て。火燭あるひしを思ふ。は。上
代の櫛齒ハ。やく長か也。さむこと知らぬ。○一火。多火
也。ても有ぬ法きを。一火としも云ふ由は。次段ふ云法し。
今世人。夜忌燭。
一火とある處。○宇士多加禮斗呂く岐而。御紀ふ。蛆沸膿
流而を書也。師云蛆を本草てふ書小。李時
珍云。蛆。蠅之子也。凡

物敗臭則生之とあり。和名抄ふは胆を波閉乃古とあり。宇士てふ訓はあし。胆と蛆を。字鏡ふは蜡を宇自とあり。蜡の宇自あるはき。今も腐爛する物よ生る小虫を宇士と云。多加禮を。今世の語ふ。去はて鳥虫れどの物ふ多く集はるを多加留と云。人多加理と人ふも云。ゆまると。但し其を。良利留禮を。活く辭ふ依哉。さあむさかり。此を禮と有まば。今世の用格とは少し異。今語は。ば此ハ多加理と。禮留留く。活く格あり。あられさうは。あるはき格あり。離れはあり。恐れおそ。乱。まど其を。通ふ例も多し。きみど。のあぐひあり。斗呂呂岐而。斗呂祁氏と云ふ同じ。盪淫鑠あど此字哉。さら

加ひや訓も。せろけさびといふ言れ。暑。汁を斗呂く。意。○八雷公とは。即下ふ見えあは。八人之。豫母都志許。賣あれあり。此あと徴。其を伊加豆知としも云としは。上ある大雷神の處ふ云。さう如く。伊加豆知を云。凡て猛く剛き物を云。稱あれれ。○副居矣とは。紀ふ。上有八色雷公とあり。如く。伊邪那美命の御上。此雷等の附副奉。て居。とめしとあり。けて夜美。因。此實の有状を。かく穢く畏き状ある故。其をは。男神。御覽。さむこを。やけし。み給ひて。前。姑く待て。見給ふれと。約。給予。依ありけ。○此段の故事と。下。大因主。神。夜見。因。ふ

往坐る段ふ見えし。蛇室屋。吳公。蜂室屋。あどけあや。は
と須佐之男。大神の御頭の虱ふ。吳公。此るか。して有し事
れどを合せて。おらく。よ。按ふ。實ふも彼。困む。伊邪那
岐。大神の。不須也。凶目汚穢之。困。と詔。牙。は。如く。甚も穢き
困。あゆむ。其を彼。困。ふ。入。坐。せ。ま。ぞ。卓。越。て。尊。神。と。ち
を。申。せ。ど。も。其。汚。穢。よ。は。み。ま。て。か。く。は。御。有。貌。と。爲。り。給
ふ。と。見。え。し。ゆ。抑。彼。困。む。し。も。始。り。此。大。虚。空。ふ。生。出。る
一。物。を。正。輕。く。赤。く。清。か。る。物。の。萌。騰。して。天。と。成。れ。は。後
ふ。は。と。彼。一。物。の。根。底。ふ。生。れ。る。残。以。て。考。は。る。此。困。土。の
重。く。濁。れ。る。其。底。ふ。成。ま。る。あ。ま。む。あ。不。殊。ふ。重。く。濁。り。は

と穢き物の凝集して成ふ。故。上。件。の。如。き。事。等。の
有。れ。ら。む。其。を。人。躰。を。以。て。考。ふ。も。頭。此。方。を。等。く。清。り
自。ら。此。理。よ。を。腰。より。下。む。卑。く。淨。う。ら。ぬ。処。も。あ。り。あ。ど
叶。ふ。終。り。け。て。此。夜。見。困。む。後。了。を。大。地。と。斷。離。れ。て。月
夜。見。と。爲。ま。は。依。を。猶。彼。困。の。成。し。邊。ふ。成。れ。る。困。は。大。地
此。下。方。あ。る。故。ふ。自。よ。穢。物。は。流。落。お。く。禍。事。惡。事。の。行。留
依。を。き。謂。れ。ま。は。困。柄。此。卑。う。依。べ。き。理。の。具。れ。る。を。と。く
思。ふ
は。し。

於是伊邪那岐命見畏而吾不

オモハイタリイナシコメキキタナキクニケリト
意。到伊那志許米伎汚穢因矣

ノリタマヒテニゲカヘリマストキニイガナ三ノ三コトハヂ
詔而逃還出時伊邪那美命恥

ウラミテマラシタマハクナゾモズキカチギリレコトラテセタマヒハヂ
恨而白曰。何不用要言而令恥

ミアレニツルイマシステニミツアガマウララアレマタミムトイマシ
見吾耶。汝已見我情。我復見汝

マウララマラシタマフトキニイガナギノ三コトモハヂタマヒキ
情白出時伊邪那岐命亦慙焉

カレムトレイデカヘラタマフトキニズタミニモタカヘリタマハテウケ
因將出返出時不直默歸而盟

ヒタマハクウカラハナレムジトマケウカラニノリタマヒテスナハチ
出曰。族離不負於族詔出而乃

ツバキタマフトキニナリマセルカ三ノ三ナハハヤタマノヲノ
唾出時成坐神出名速玉出男

カ三ツギニハラヒタマフトキニナリマセルカ三ノ三十八ヨモ
神次掃出時成坐神出名豫母

ツコトトケノヲノカ三マタノ三十八マラスオホコトオシ
都事解出男神亦名謂大事忍

ヲノカ三トアハセテフタバレラマスイマモヨノヒトヨルイムトモスコトラ
男神凡二神矣。今世人夜忌燭

ヒトツビヲハコレソノコトノモトナリ
一火者。此其縁也。

見畏而之。師云見て畏むる也。古事記ふ所く此詞何也。

見驚見喜見感あど加志許牟はたそゆる古とあり推古

も有てみあ古語ぞ。加志許牟はたそゆる古とあり推古

卷歌ふ。訶之胡彌氏とあり。字鏡ふ悸を惶也や注し加志

古牟とも於曾留とも有り。○伊那志許米伎汚穢因伊那ハ辭否あぞく同言ふて此

は惡み厭ふ御言あ也。書紀よ不須也と也。字を添られと

心得。○志許米伎は。まは志許ハ。師説ふ志許賣の志許と

一うて醜あ也。万葉ふ鬼乃益ト雄鬼乃志許草志許霍公

鳥鬼之四忌手之許都於吉奈。おれらの鬼字を於尔乃と

偏を畧るう。又醜女の意を得て鬼。れど云る。皆其物を惡

とハ書り。いばまよまれ志許あり。れど云る。皆其物を惡

み罵て志許とは云あ也。米伎は。免む米き免く。め

免く。むし米く。けく。免く。おま米くあぞ。多く云米久の活

けるふて。此も直ふ夜見の何り。いまを。其貌を云辭あ也。

書紀よ。不須也凶目汚穢。此云伊儼之居梅枳多儼枳と

何也。又天忍穗耳守の天降まい処。○到矣は彼因ふ行

給ひし事を歎息て。かく詔するれ也。○逃還。逃てふ言也。

雄略天皇卷の大御歌ふ。爾宜能煩理斯と何也。○何は那

敘母と訓ばし。痛く咎給へる御言れぬ。○不用要言而
は。知岐理斯言袁伎加受氏と訓むる。用字を常の訓此
訓を非。ちて其要はせせる御言は。かの且與豫母都神相
論莫視吾と詔予依是あす。○令恥見吾耶ハ。恥を與るを
恥見ぬ云は古語れぬ。ちて如此白し給ふは。彼汚穢き
御有状を男神の見給ハむと。我恥給ひて。莫視給ひそ。
と禁あるへるを用給はて御覽あす事を。甚く恨怒坐依
御言あす。前よ御産の処を御覽し。時を。恨み坐る
よ。著明く見えて。其を豫母都戸喫し給ひて。歸坐がと。死
いと畏ぬあむ。御身あらの男神の入來坐るふ。さびぐふ歸坐むの御心

何ゆて。豫母都神と相論て。其道何らば。帰らむと。議し給
ふ間。待何予給えて。恥見せ給予すしうば。其慙歎ある
御心の餘ふ。加予して御怒を發し給予るあり。穴かしあ。
○情を。麻宇良と訓ばし。訓ハ非あり。此を女神の御會
處のことよて。言義ハ眞心あり。下。第三百六。小。豐玉毘賣命
雖恨伺情事。と何る情も同じ。此をも旧く。コ、ロと訓ば
て此を。前よ那佐那と訓ばま。後の稱れる故了。改。其
己前ふ成文を撰給る時。既くコ、ロと訓るが非ある
事を悟りて。中世の戲籍ども。會處をナサケドコ。ロと
云ふこと何るを。上古より。彼處を。其名を。躡了言けり
こそ。斯て情字をナサケと訓む。彼處を。情の本處ある
故よ。是よめ轉して。物此哀を知る心をも云あらむと思

ひてナサケと訓しうと此ハその正き
始の稱を以て云なき所あれむあり
此本あるが。漢字を填れバ即チ此を轉用して。會具をも然
稱するハ。彼處ニカバ人の眞情也。凝結るは處の無れ
れ也。伊藤長胤が辨疑録。情者好惡之實。人心之無飾
者也。古書中或替實字。說曾子曰。如其情。哀矜而勿
喜。大學曰。無情者不得益。其辭左傳稱。晉文公曰。民之情。傷
益知之。故或曰。事情或曰。情願。好色之心。人之所必有。而最
無飾者。故曰。情欲。實則相沿。為好色之心。示其心之所好。
而無飾者也。と云。るをく叶へり。詩。小序。標有梅。男女及
時也。の注。陳氏曰。男女及時之說。聖人之慮。天下也。血氣
既壯。難益。自檢情實。既開。奚顧禮義。云々。と見え。亦情
字を會處ニ名け。關係せる語いと多く。念く彼處に疑思はる
多。情痴と名け。彼處を人ニ委。出る字。情人。或は情郎と云。
六朝遺事。煬帝戲。月。賓曰。儂之愛汝。只是情。と云。るあせ
は。會處を直。ふ情と云へり。猶多うれど。然のみ。挙むこと
洩し。於。但し。此は。女會を此み云ふ。非。本と。男根を

も云ふ。我思。子。也。麻。宇。良。ハ。男女。通。稱。也。其。次。文
汝。情。時。伊。非。諾。守。亦。慙。扱。ま。と。麻。宇。良。を。麻。良。と。も。云。子。ゆ。
馬。と。何。る。よ。て。著。し。扱。ま。と。麻。宇。良。を。麻。良。と。も。云。子。ゆ。
あ。は。約。言。ふ。宇。を。省。く。た。常。あり。印度。籍。梵。語。根。字
母。羅。也。云。ひ。ま。と。麼。羅。と。も。云。へ。り。さ。て。彼。大。梵。自。在。天。王
我。麼。羅。と。云。ひ。其。后。神。を。毘。摩。羅。天。と。有。て。夫。婦。共。了。麻。羅
と。云。を。思。子。也。男。女。通。稱。ある。あ。せ。い。と。論。あ。し。
然。は。よ。女。會。我。此。方。ふ。て。然。云。子。は。こと。未。その。例。を見。交。
け。て。男。易。を。麼。羅。と。云。は。は。拔。靈。異。記。に。開。万。良。と。見。え。
和。名。抄。に。房。内。經。云。玉。莖。男。會。名。也。楊。氏。漢。語。抄。云。屢。亦。作。
前。一。云。麻。羅。今。案。玉。莖。義。不。見。と。有。也。此。を。今。印。本。に。屢。破。前。一。
屢。鬘。骨。可。為。玉。莖。義。不。見。と。有。也。此。を。今。印。本。に。屢。破。前。一。
良。也。有。れ。ど。麻。字。の。下。ある。前。を。行。あ。也。あ。を。破。前。の。前。字
ある。物。と。見。え。と。ゆ。け。て。破。前。ハ。元。と。り。假。字。あ。也。但。し。い
け。う。意。を。用。ひ。て。書。と。る。字。ふ。や。有。む。○。或。人。云。ハ。ぜ。と

云魚あり形王莖ふ似あけて此麻羅てふ語を前ふ思け
也。それ故ふ名けとる。けり。古語拾遺ふ。男莖を袁婆斯と訓み。和名
抄ふ破前。太秦牛祭文よ。大閩おどる。是古名よて。麻羅
ちふ名を。中世の比丘等グ事好みふ。梵語を以て稱せる
の。世ふ弘はれる稱あらむ。お布太秦牛祭文よ。まに閩風
とも見え新猿染記ふ。開大而
長八寸四伏云く。れど有り。れ布麻
羅ちふ名は書等よ數見えとり。其を古事記を始。古
書どもふ。天津麻羅命。大麻羅命。天都赤麻良命。天照眞良
建雄命。れど云名何也。姓氏録ふ。麻羅宿
祿と云人も見也。麻羅てふ語。もし
元とて。會具を云名あらば。其を神名ふ。負はくも非也。神
名の麻羅を。眞浦とも。麻占とも書とる例有れむ。此は万

葉歌ふ。且日照依嶋の御門ふ鬱悒あく。人音も爲祿。眞
浦悲しも。と詠とる眞浦と同じ古言ふて。眞心の義あら
ば。儲こそ天津赤占とも見えとれ。浦占とも
ふ借字とて心の義あること言も更あり。會具を云ふ
麻良とを。元とて別ふ也。思ひ決。於て在るふ。此頃大
自在天の神實。天根れると。彼御戈。古傳を思ひ合せ
て。神名。麻良。はと會具を麻羅と云も。元よ古言ふて
梵語ふ。自在天を麻羅と云も。我が古言の。彼因。傳をれ
依よて。同語ある事を解得とめ。そを我友荻野長は佛
籍ふおとあき博覧お
ま。上よ云ふ。會具を麻羅と云は。梵語よて。神名の麻良
とは別あらむ。と思ふ考を語し。長云く。印度ふて。
華蔓を麻羅と云ふ。是語の本。自在天字も。あう云を。
其餘れる華蔓の。美麗あると。負る名と聞也。そハ我が

古、珠王を身の飾とせる哉思ふ。天津麻羅命、亦云ふ神名も、由有て聞ゆれど、余多麻羅と云も、元より此方の古言あるべし。猶今一度とり並べ考ふよと云ふ催されて也。彼これ思ひ合はる。神の名は麻良も、眞心亦依上を。此處の情字は麻宇羅を訓まむ。論ひ無れど、御典を記せる人々、其意を以て。此字をば書れり。然まば、男女は余處に通る名亦依こ。既云、御紀文、おて著明亦依字。上より引く靈異記、和名抄、まと餘書等も、王莖此みの名として、今も然稱ふまど。此を後の事と爲法し。女余此名を鎮火祭、詞、保止保、神樂哥よ、余名久保、桑家漢語抄よ、余門比奈登、和名抄、小房内經云、王門、女陰、名也、通鼻、楊氏漢語抄云、吉舌、比奈佐、伎、亦と、西、男、易をヲバせと云、男、柱の轉語と聞也。実よ、男の柱あり。但し、此名ハ、彼、瓊、戈を、固中、ハ、御柱

と為給、予る謂と、正名、とりぬむ。ま、此、依て思へど、神、ま、と、貴人、を、計へて、幾、柱と云、こ、とも、師、説、を、有、れ、ど、男、莖、を、柱と云、より、出、と、る、語、ある、り、扱、ま、と、往、年、駿、府、ハ、物、せ、る、時、ハ、小、原、雄、英、老、翁、が、語、ハ、男、余、を、閉、能、許、と、云、を、保、古、と、同、語、あらむ。閉能の切、正保、亦、ま、む、あり、と、云、を、聞、入、ま、む、と、も、所、思、ざ、り、と、今、思、へ、ば、少、り、由、あり、説、ハ、乱、割、其、勢、勢、者、則、陰、核、也、と、有、ハ、字、彙、ハ、宮、刑、男、子、割、勢、勢、外、腎、也、と、云、ハ、扱、ま、バ、畢、丸、を、い、ふ、語、ある、を、今、は、並、て、王、莖、を、云、ふ、語、と、あり、名、の、趣、多、思、へ、む、王、莖、の、名、ハ、並、て、て、聞、ゆ、る、を、今、い、ふ、所、正、し、く、て、陰、核、の、名、と、せ、る、を、和、名、抄、の、誤、ら、ら、む、也、知、る、ら、び、衆、經、音、義、ハ、勢、峯、謂、陰、莖、也、と、何、ハ、餘、の、西、戎、籍、も、此、名、也、
印度ハ、謂、ゆ、る、大、梵、自、在、天、王、を、云、を、始、免、男、易、女、余、此、名、
也、も、此、と、取、總、て、印度、藏、志、の、大、千、世、界、品、末、節、の、處、ハ、
諸、經、論、を、引、て、委、く、論、ふ、を、合、せ、見、る、法、也、○盟、之、曰、言、義

下ヲ注^ル。第三十 〇族離。族ヲ本書^ノ。宇我^ガ邏^ラと訓注あ

ハ。親屬ま^と親族同族^も有^レ依^レを。皆^も訓^レ言^ハ義^ハいは

ど考^テ牙^ヲ得^ズ。安^ノ康^ノ天^ノ皇^ノ卷^ノ。等^ノ族^ノといふ言^もあり。師^も宇

考^ふべし。と。賀^ハ良^ハ生^ノ族^ノ。夜^ノ賀^ハ良^ハは家^ノ族^ノの意^もあり。亦^もとく

云^レれと^ハ。ち^て此^ハ。夫^ノ婦^ノの御^ハむ^レお^レびを斷^ル給^ハむと^ハハ

ハ。其^ノ上^ノ件^ノの穢^キく畏^キ有^レ状^ヲを御^覽去^ルの^ハば。御^後を追

て來^シ坐^ル御^心此^ニ失^レ給^ヒお^レれむ^もお^レる^ハ。俗^ハお^レい^ハその

云^ハ心^ハば。〇唾^ノ之^ノ時^ハ。和^ノ名^ハ抄^ハ。唾^ハ和^ノ名^ハ豆^ノ波^ノ岐^トハ。師^云。唾

ハ。津^ノ吐^ノの意^ハあり。と有^レハ。亦^ハ記^傳十^ノの五^ハ。ち^て唾^シ

給^テ牙^ヲ依^レむ。彼^ノ穢^キ有^レ状^ヲを御^覽去^ルて。其^ノ穢^キお^レ得^レ堪^ル給^ハむ^レ

て^ハ此^ノ御^所爲^ルあり。今^も穢^キ物^ヲを^見て。堪^グと^ク思^フ。〇速^王之

男^ノ神^ノ名^ハ義^ハ速^ハハ唾^シ給^テ牙^ヲ依^レ状^ノ。速^ウハと^ハ申^セ依^ル。

は^ハ例^ノの^ハ。お^レ稱^ルと^ハ言^ハふ^も有^レ依^レ。玉^ハ津^ノ吐^ノの形^ハ。

玉^も似^トま^シ。か^は申^レる。神^名式^ハ。出^雲。因^意。宇^郡

ハ。速^王。神^社。紀^伊。因^牟。婁^郡。熊^野。早^王。神^社。大^〇。早^字。速^ハ

此^ノ社^ハ。清^和。天^皇。紀^貞。觀^元。年^正。月^廿。七^日。從^五。位^下。熊^野

早^王。神^從。五^位。上^{。同}。年^五。月^從。二^位。同^五。年^三。月^二。日^正。二

位^也。見^え。長^寛。二^年。賴^業。勘^文。天^慶。三^年。二^月。正^一。位^と

ハ。熊^野。新^宮。と稱^ハレ。是^ハ。夫^ハ。木^集。ハ。檢^校。法^親。王^ハ

也^ハ。玉^ハ。む^レぶ^ノ。宮^ハ。光^ハ。そ^ハ。ふ^ラ。む^レ。新^宮。と^ハ。り^ハ。さ^テ。新

宮^トハ。此^ノ社^ヲ並^ビて。熊^野。坐^シ。神^社。あ^リ。お^レ對^ヘて。云^ハ。る

べ^シ。南^紀。名^勝。志^ハ。熊^野。村^新。宮^庄。ハ。上^熊。野^村。中^熊。野^村

下^熊。野^村。あ^リ。今^新。宮^村。と^云。も。元^ハ。熊^野。村^ノ。内^ハ。れ^ド

も新宮大神鎮座以後所名とせるが諸書小熊野村と云るハ此処あるは凡て年婁一郡を熊野と云るハ新宮熊野村は因て云ふと見えとゆまに有馬村を木之本庄木之本村の南二十町許ふ何に村の中央に有馬と云ふ此西辺に産田神社ありて伊弉冉等を葬る処を言傳ふと云ゆあち此熊野村のことと第七十九段熊成峯の処に委く云ふ○掃之時此を何を以ていりふして掃給を合せ考ふ○掃之時此を何を以ていりふして掃給

予と云こせ今知はきふあら祿ど若を御衣の袖ふて掃ひ給予るれらむの其を今も心よりぬ物を掃ふとは然為ることある字思べし
○豫母都事解之男神大事忍男神此二名義師云未だ事解之男とは去の解字昔に佐加と訓ども然訓をきさごうある證も例もあけまむ登祢あらむ
女神男神族離あるふ方ふ就て負せ奉りし名れる茂下小女神の御言ふ吾與汝已生國矣まに伊邪那岐大御神神功既畢御徳示大矣

もと有れむ夫婦離給ふも既ふ大なる事業の成竟し故れまば此神名も其方ふ就て事解とも大事とも稱しあらむ然まば此二名いひもて行らむ一意ふ當れに忍男は例の稱ありと有に師の此説に依てれを按ず解と遂も事を為し竟ることをも速王之神大事忍男神此の時為遂ると云を思ふべし速王之神大事忍男神此時成坐る由を速須佐之男命の生坐る處に云依言を合せ考ふはし○今世人夜忌燭一火者此其縁也ハ伊邪那岐命の此時一火燭して見給予依おとの夜見おて有とありとせぬると同きを忌て世人の一火燭はぬと此とあり然まむ古燭火は二三もはといくおも燃物ありむ

師云。今世も石見、綱おどふてた。神も供る燈を。一とも
去ことを忌て。必二口ふをも。まよと櫛を授ることを
忌むありと彼
國人云。巴き

十三

於是伊邪那美命。即遣豫母都

志許賣。亦云豫母。八人而令追

矣。故伊邪那岐命。拔御佩出十

拳劍。而於後手揮乍逃。行取黑

御鬘。而投棄出。則乃蒲萄子生

矣。豫母都志許賣。撫食出。間逃

行。然噉了。而仍追。則亦刺其右

出。御美豆。引闕湯津。柷櫛。而

投棄出。則乃笥生矣。豫母都志

許コメ女マタ又ヌキ拔ハミ食ソノ其タカム筍ナラハミ噉ヲハリ了テ而マタ更オフ追。

最イヤ後ハテ則ニハ其ソノ妹イモ伊イ邪ザ那ナ美ミ命コト身ミ自ミツ

追オヒ來キマ焉シ是キ時コノ伊イ邪ザ那ナ岐ギ命コト已ス到デ

坐マシ豫ヨ母モ都ツ平ヒラ坂サカ隱ニ坐カク其リ坂マシ出ソノ桃サカ

樹キノ下シ而タ其ニ實テ三ソノ箇ミ採ツ而トリ待テ擊マ出チ

則カバ雷イカ等ツ悉チ逃ド返モ矣コト爾グ伊ニ邪ゲ那カ岐ヘ

命ミ告コト桃ノ曰リ汝モ如ニ助タ吾マ所ハ有ク宇イ都マ

志シ伎キ青アラ人ヒ草ト出ク落サ苦ノ瀨オ而チ愆ウ苦キ

出ム時ト可キ助ニ焉テ詔ヨ出タ而ス賜ケ大ト加ノ牟リ

豆ヅ美ミ命ノ云ミ名コト矣ト此イ桃フ出ナ避ラ惡キ鬼コレ

コトノモトナリニタヨルイムナゲグレラハコレソノコトナリ
事本也。又夜忌擲擲者。此其縁

也。

豫母都志許賣八人は。御紀ふ醜女此云志許賣と何也。今

は此注と。古事記ふ從て記せ也。八人也。本ふヤツヒト此

也。多理を訓るし。けて師説ふ。私記ふ。或説黄泉之鬼也

と云也。但し鬼とて。儒佛の書よとく鬼の意ふ。非実也

と云是。書紀欽明卷ふ。魅鬼と何るも其意あり。和名抄ふ

女を鬼魅のけて名義也。形のおそろしく。見惡き哉云ふ。

下文ふ。伊那志許米云く。有ると同じ。猶彼処よ。せ何也

此八人れ志許賣也。上ふ。八色之雷神也。何る即是あり。上

十八段よ言。けて此を何と豫母都日狹女とも云は。名義

いほご思ひ得也。試ふ云は。和名抄ふ。販婦比佐岐女と

豫母都圀の煮炊き此事おどを掌る。卑き物と聞えと也。

然らむ醜女とハ其容の醜き多し。伊那那岐命を追

奉れる。嚴き己ざり云ふ。有る。伊那那岐命を追

け短き鬼此如き物をレカ三と云ふ。此レコメの轉れる

ふ。是短き物と見ゆる。世ふ。扁みて潰れとる物をヒ

御佩之十拳劔也。上ふ出と也。○後手ハ。師云手を後さ

は子廻して物にるお。うお本物語ふ。志。子手ふ志。お
に云々と有。○揮乍。師云。古言よ振を布久。も云し例。
万葉ふ。草の山吹を山振とも書。風吹と云も。振と
通ふ。比。礼と云あり。はと皇極紀ふ。揮劍とも。乍。ハ此
戎爲れ。彼をも爲るを云辭あり。且くの約まりとる
歟と。は。さて此處を。豫母都醜女の追來るを。防ぎまほ
御所爲あり。はま。相向て防ぐと。た。得逃給を。終ふ依
て。逃あぐら防ぎは。故。後手ふ物し給ふ。師も志
に。○逃行。師云。行字は。伊傳坐と訓。そは必。出坐。から
祢。行給ふと云。お。を。然言ふ。古言。○黒御鬘。

師云。凡て加豆良ふ。三の品。は。葛。蔓も同じ。と鬘と。髪と。お。
ま。葛ハ。葛。ら。五。味。忍冬。れ。凡て。蔓草。は。お。れ。
鬘ハ。頭。の。飾。ふ。懸。る。物。あり。古書よ。蔓とも。鬘とも。書り。蔓れども。鬘意あり。鬘ハ。鬘の。字。書り。見え。或。縵。を見え。と。かき。ご。ま。は。異。あり。れ。髪ハ。和名抄。和名加都良。釋
名。云。髮。少。者。所以。被。助。其。髮。也。と。有。り。て。俗。よ。加。毛。自。と。云
物。お。如。此。は。ま。く。は。ま。ご。も。本。は。一。と。に。轉。れる。名。ふ
て。草。は。葛。よ。出。る。は。て。其。葛。の。本。は。名。を。都。良。よ。て。古
事記。中。小。登。許。呂。豆。良。都。豆。良。書。紀。万。葉。磨。左。棄。逗。邏。和
名。抄。よ。千。歲。藁。百。部。お。と。云。し。お。れ。ら。の。都。良。を。加。豆。良。の。畧。と。思。ふ。本。末。と。が。分。り。ぬ。
忍冬。も。字。鏡。ふ。は。須。比。豆。良。と。は。お。拾。遺。集。雜。下。よ。は。ご。お。あ。く。れ。る。瓜。の。お。

ら見てもと詠るを蔓ツラ子ツラ類を云うけとるあり。今都留と云ふ都良のうねるあり弓の弦をも万葉に都良とと糸り馬具に漣シズメ頭の都良も草に蔓よりぞ出々む漣を手綱にことあり。けして何ふまれ蔓草を以て頭カシラに飾ふかくるを髪カミ葛ツラと云ふ。是即髪あり。けして然シカ髪カミ小用ふるから立の牙りて草に葛ツラをも加豆良カヅラとは云ふらむ。はと髪も。髪を飾具カサシモノあまた。髪とおあじ名を負オウせけ。冠カサさて髪ハ。上代了ハ。女男せも小懸る物ふて。蔓草を用ひしおとは。石屋戸の段小。眞マコ折サキをうけしを始て。今云。師を古事記に依て。眞折を髪カミせし由ふ言まされど。此は誤ふて眞折ハ手次あること。其段の徴論る。如し。日影ヒカゲ髪カミおどはと必しも蔓ツラれら祢ネと。花ハナ髪カミ菅スガ蒲ヤブ髪カミ柳ヤナギ髪カミ。木綿キヌ髪カミれぞ何ナニ也。おれら母加豆良と云名。まゝと絲イトおどを

以ても作ツクししふや。珠タマをうざるおと。天照大御神の御飾小見えとめ。今云此おと第三。玉タマ髪カミと云は是あり。髪カミも玉タマうねらと云ふ。此の玉タマ髪カミの名を移して。呼ヨのまゝと只ただ不ふ先まて云ふよもあるべし。安康ヤスキ卷マキふ。押木オシキ玉タマ纒マキと云も有て。貴タカき寶タカラおどしおと見也。万葉マンヤク子コ波ハ禰ネ纒マキと云ふお母ハハ何ナニ也。纒マキ字ジハ。此物モノ舛ムジふても糸イトしても造ツクまるる字多し。纒マキも本の字義ジギは。たか。はらで右の意もて用ヨウゆあるは。○和名抄ワナヒトコトハ。花ハナ蔓マキを伽藍カラン具グ子コ載ノされども。此コノ後ノチもと天竺テンシクの人ヒトハ。頭カシラの飾カサシモノあり。○今云。万葉マンヤク子コ波ハ禰ネ纒マキと有るを。凡て纒マキハ垂タラシる物モノれるを。波ハ禰ネ上ノるべく造ツクるを云ふ也。其コノ今イマ世ヨ小童コドモ女メの挂カケる。波ハ禰ネ元ノ結ムスと云物モノも。元ノ結ムスとハ云へど。髪カミの飾カサシモノは挂カケるも此コノうて。実マコトを纒マキあるハ准ス備ヒり。然シカ思オモふ。けして此コノ小黒コクロと何ナニも色イロもて云イハれるは。けし。何物ナニモノふて。何ナニ如イカニ作ツクます也ナリ。せも知チらる。都豆良ツラを黒クロ葛ツラと

ふ由蒲子の成まるふ就て思ふば。此鬘のさは蒲萄葛エビノミふ
あし。玉を垂タレと流ぐ。彼實ミのあれる形カタふや似とせけむ。色
似て。黒加クせけむも。彼實ミふよしあるや。と有り。○棄スハ。師
云。八千矛神の御歌。脱棄ヌケを奴岐ヌギ宇氏ウヂとみ給へり。紀
吹棄此云淨枳干都ツ屢ルとあり。此ふ依て宇氏ウヂと訓ツばし。○葡萄子ブドウ。師云。和
名抄ワナヒ。紫葛ムラサキ。和名衣ウエ比加ヒカ豆マメ良ラ。葡萄ブドウ。和名衣ウエ比加ヒカ豆マメ良ラ乃美ノミ
とあり。或説シよ。此物モノ鬘ヒゲあてて。蝦エビふ似とる蔓草マンソウある故ユふ。
然名くと云フ。○撫フは。師云。字書ジショよ。拾也シツとも取也とも注
せ。けて比呂ヒロ比ヒ。比理ヒリ比ヒと古言コゴトふ云フ。方葉十五ふ。比
比て有り。れ。あ。き。於。白。王。比。利。○逃ニゲ行イデ然シ。然シ字ジハ。師の行字イデを。伊傳イデ坐マ衰シと
とあむ有り。

訓ツれある衰シふあり。予ヨグ加カとるあア。○湯津ユツ抓ツ櫛シ。師云
前マふ。男柱オトスを取トル闕カケとトる。此コノはハ引ヒキ闕カケとトれむ。
引と取と有り。ハ。凡。の。齒。此。中。引。闕。あり。ふ。れ。ゆ。又。前。あり。異。あり。意。あり。凡トの齒ハ此ノ中ニ引ヒキ闕カケありふれゆ。又前マあり
は。左ヒダリの御ミ髻ヒゲあり御ミ櫛シ。此コノありは右ミダリのハ也ナリ。○筍タケノコハ。師云。字
鏡キョウふ。筍タケノコ。太タカ加カ牟ム奈ナ。和名抄ワナヒふも。筍タケノコ亦モ作シ。筆ヒツ。和名太タカ加カ無ム奈ナ
とあり。後の物。多加。宇奈。と。云。凡。て。半。を。宇。と。云。あ。ま。例。多。し。音。便。あり。名ナ此コノ意イ。竹タケ芽メ
菜ナあア。菜ナを食クハふ添ソエて喰クハ物モノの凡ト此ノ名ナれレ。かカまマババ筍タケノコも。
菜。子。と。云。故。ふ。哥。よ。を。竹。子。と。此。こ。よ。免。也。此。を。抜。食。と。れ。む。菜。あり。櫛シの齒ハ狀カタ。竹タケ子コの竝ナリ
立タテるふ似ニとあり。下シタふ鹽シホ土ツチ。老翁オウボウが。玄ソノ櫛シを投ナゲしシらば。五百イハヒト箇ツ
竹タケ林カミふハれレと有アるも。此コノ類ルイあア。○最後ノチハ。師云。神武カムヤマト卷

ふ伊夜佐岐陀氏流とある。大御歌詞に依て。伊夜波氏と訓るし。人の御哥此前詞よ。知立於最前とあり。○拾芥抄云言を彼大御哥の所ふ云べし。大名牟遲神段ふも。於最後來坐せし。枕冊子よさいをて此車と云るを。最後之車あり。其頃を最字を音了てぞ云々むま。今言よ。最前と音了て云も。もと伊夜佐伎てふ。波氏とは。何事よはれ。物の終を云こと言とりぞ出々む。○身自ハ。師云美く豆加良を訓はし。常ふを自一字を。みぢのらと訓免ども。おのぢのら。己自らあり。ぢのら。手自くちぢか飛。口自あり。おぞを云牙ば。自は加良ふて。みぢのらは身ぢ自れ。今云此餘。困がら。人がら。日自あるは柄。○桃樹木の名此物ふ見えよる始あり。○の意ふを非じ。

待撃之ハ。師説ふ。來るものを待受て打あり。景行卷ふ。倭建命此蒜の片端を以て。足柄此坂神を待打あるふとあり。依ふ同じ。古言うは。待問待取待攻待戰待向。おぞ云るおぞ多加。此を早く來むこと。或欲はるを待と云と。異あり。來る者。向ひ承依を云あり。後の物語おどよも。待云くと云語お布し。○今云伊勢山田辺よ。て。磔を打ことを。白桃をくらむせると云とぞ。此ふ由あり。○悉ハ。師云許登基登通と訓はし。火遠理命。○如助吾とは。師云。即今古の桃子を以て。まよ万葉五卷。○古史傳五。○五十九。追追來し者共を撃退けて。難を此ぐま給ふ故ふ詔ふれ。○所有ハ。阿良由流と訓はし。伊波由琉と同格の言ふ。○古史傳五。○五十九。由琉伊波由琉おどを。漢籍詠の

言とのみ思ふて誤あり。凡てからぶみよこよ。古言の遺れること多きぞのし。○宇都志伎青人草。御紀ふ。顯見此云。宇都志伎と何也。師云。私記ふ。顯見者。見在之義也と何也。かくれむ宇都ハ現志伎之嬉悲の類。此志伎ふて。辭あり。神武紀ふ顯齋此云于國詩怡破毘統紀十宣命よ。宇都志久母ふとあり。けて人草此事を如此詔ふ。書紀大穴牟遲命の御言ふ。吾所治顯露事者。皇孫當治吾將退治幽事云く。かく幽冥事。對て顯露事と云る。如く。目ふ見え。顯あらぬ神よ對て。顯とる世人を云ことぞ。應神卷よ。神習。青人草習。を神よ對て云るあり。雄畧天皇の葛木神の形を顯して見え奉。給ふを。宇都志意美と詔へる。ま。師說ふ。万葉よ。空蟬。借字

宇都曾臣あど何るも。みお顯志き身と云ふと何也。何る。は。現心夢現あぞの現。みれ同言あり。青人草を云。所以。次の文ふ。千人死。千五百人生と何る意ふて。草の彌益く。ふ生茂む。びあは。譬とる稱あ也。青せしも云る。ふ心を著げし。私記よ。貴人を木よと云。賤民を草ふと云。説を非こせあり。故此稱は。神の人の利益を爲給ふことぞ。人此損害を爲給ふこと。ふ此み。必用ふ稱あ也。神の人を利益とるふ。千五百人生は。意あり。さて損害をあらは。其ふ逆ひ敵むあり。故共。此稱を云れ。古書どもをく見通して。眼を著る。予云こと。の虚。うらざる。こと。自けと。何。○。の。困。蒼生。黔首。あ。と。云。意。を。甚。く。異。あり。也。免。此。文字。了。迷。て。意。を。と。誤。る。こと。勿。き。書。紀。よ。蒼。生。と。作。れ。る。ハ。と。と。ある。と。ま。似。と。る。稱。の。文字。を。取。ま。と。る。の。み。あり。○苦瀨ハ。師

云。久留志伎勢と訓むも、師の宇伎勢と訓まるところぞや。然ことおまきぞあま。師の宇伎勢と訓まるところぞや。瀬を歌ふ。嬉勢。哀勢。戀勢。逢勢。如是有勢。おまを賦ことれ也。おの勢てふ言は。凡て縦ふも横ふも用ふ。縦とは時あり。長く經行時の間ふ。人よ逢時を指て逢勢を云。此餘も同じ。横とは處あり。川に瀬おど是あり。川ふ云。上よ下へて。はて長き流此間ふ。濟る處を指す勢とは云ぞ。古哥ふ。渡瀬とある是あり。けて川を。浅き處をえりて渡るものあれ。渡瀬を。必浅き處あり。故それより轉りて。必渡る處れらる。と。浅き處字も瀬とハ云おま。まゝとあき於せ。早瀬おども。本を己とめぜよめぞ出つらむ。はと痛く後。此おまをねまど。西行が歌ふ。此處を勢ふせむと云るも。此を其處とせむを云意あり。此の苦瀬を。苦患こそお當れ。

流を云て。縦横ふ己とれめと何也。○落を。師云沈と同じ。凡て凶ふやくを落とも沈をも云ひ。吉ふやくを上るとも浮むとも云也。○愴苦ハ。本お患愴とあるを。火遠理命。段よ。愴苦をあゆむ。よく通也。替也。師云。久留志牟と訓る。天智紀の童謠。愛俱流之衛云。阿例播俱流之衛とと也也。愴の俗字と何也。字書よ。愴恫。不得志也。ととも。不得意。兒とも。まゝと愴恫。不得志也。ととも。愴恫。不得志也。ととも。注し。まゝと愴恫。申吟也。と。まゝと愴恫。不得志也。ととも。注し。まゝと愴恫。申吟也。と。○可助焉。師云。多須祁氏余と訓はし。上の如助吾を。此子かけて見はし。今吾を助しが如くふ。可助と云。おまおま何と何也。焉字は私お加とるあり。○大加牟豆美は。師云。大神之實おと。谷川氏云へり。さも有べし。但し。大神。

と抄けける言ふを何らば神於実此號を奇功を美て。か
 お大てふ言多添て稱へしあり。○今云豆美の義を師の今一
 の神とは稱予給ひしれ也。○考予も有て山津見此津見
 と同じ意ふ解れとまど此豆○此桃之避惡鬼事本也師
 美之之実の意を有べき。云桃の後世まで鬼魅を避るハ此大詔ふとれ也。漢籍お
 のさる功能あること哉これうまふ記せるを見れむ御
 固れみあら交外國の未までも此大神の大詔の驗あり
 りゆあしと知られていと貴し。○今云お不第十二段執川
 菜の火を鎮むる功能あるとを云る処に注せる説と
 もを合せ考べしさて尾張國あぜふて雷の鳴るとき童
 子ども此雷よ落と桃木で多く加うと云とぞ此の故事
 小由あること。○又夜忌擲櫛者此其縁也擲櫛ハ那宜具斯
 とおるばし。即本書ふ然有也。櫛多擲ると訓其を本ハ櫛を
 擲るとまれまど。既其事の稱ふ形まざる語なれむれ也。

事本也ハ聞えあるが如し。

然れど其解を記傳三十
 四卷四十八丁ふ見也。

於_コ是_ニ伊_イ邪_ザ那_ナ岐_ギ命_ノ以_テ千_チ引_ビ磐_イ引_ヒ

塞_サ其_ヘ坂_ソ路_ノ而_チ中_ニ置_テ其_ナ石_カ各_チ對_ニ立_テ

而_テ度_ワ事_タ戸_ス出_コ時_ト伊_ト邪_キ那_ニ美_イ命_ガ白_ナ

曰_タ愛_ハ出_ク吾_{ウル}名_ハ妹_レ命_キ汝_ア如_ガ此_ナ言_セ則_ノ

アハイシノクニノヒトクサヒトヒニ千カシラナトクビリ
吾汝圀出人草。一日千頭將絞

コロサマヲシタマヒキコノニイガナギノミコトノリタマハク
殺白給矣。爾伊邪那岐命詔曰。

ウルハシキアガナニモノミコトイミシカシタマハハツアレ
愛出我汝妹命。汝然爲出則吾

ハヤヒトヒニナタテ、チイホウブヤヲヨリコ、
哉。一日當立千五百産屋。自此

コナタヘクナトノリタマヒテスナハチナゲウテタヒソノミツエヲ
以還莫來詔而。即投棄其御杖

キコハラモテヒトヒニカナラズチビトシニヒトヒニカナラズ
矣。是以一日必千人死。一日必

千イホビトナモウマル、
千五百人生也。

千引磐石。師云知毘伎伊波と訓ばし。知毘伎能ととまぬ
ぞ古言の格也。

此を書紀ふ。千人所引磐石を書れるは。稱此意を顯せ

依れ也。万葉四ふ。吾戀ハ千引の石を七ぞが也。頸小繫む

も云く。和名抄も。知比木乃以之とあり。私記も同じ。か

有れども。石ハ伊波と訓ぞよき。はと下ふ。五百引石を云も見也。○引塞

也。師云比伎佐間と訓ばし。佐間ハ令障也。それらせを切
れバ聞あり

令合を阿闍と云。下ふ。以五百引石。取塞其室。戸も有也。引と取とを。同じと云ふ。如是爲て。追來坐。依女神を。御留免奉也。給ふ也。○各對立而ハ。師云。阿比牟伎多。志氏と訓法し。万葉八。天漢相向立而。向立。あど何也。書紀ふ。此を相向而立と書也。○度事。戸ハ。許登度。袁和多須と訓法し。其は御紀ふ。建絶妻之誓と書て。絶妻之誓。此云許等度とあ也。私記よ。度者猶如言度也。師云。今俗言よ。人ハ受持あむべき事を。言付るを。申渡れと云ふ。とく似たり。さて許登度てふ。あぞは。御紀ふ書れと依字ふて。大意を聞えぬ也。荒木田久老説。万葉二卷。狂言等も。二所あり。十七卷。多婆許登くのも。とも

書七卷。小事等有。あくふ。十九卷。神言等。まよ公之事跡。乎。れど何るよ。依て考るよ。此ある事。戸ハ。御誓言。此切あ。依を云。あらむ。神代紀ふ。大諄辭。此云。布斗能理斗。とある。下の斗は。事。戸の戸。同じ。れ。布。万葉集中。例多く。皆そ。此事を。切。い。比。きは。む。る。添。と。る。意。ハ。同。じ。添。い。ふ。登。の。言。を。や。後。の。哥。も。見。ゆ。る。を。今。の。哥。人。を。さ。る。言。あ。正。と。も。知。ら。ぬ。也。凡。て。古。の。證。さ。む。れ。と。も。思。ハ。交。心。を。用。ひ。ぬ。也。せ。云。て。例。を。多。く。擧。と。依。字。其。は。此。人。の。万。葉。解。故。あり。小。就。て。見。る。ば。し。録。胤。云。右。引。と。る。万。葉。十。九。卷。あ。る。公。伴。家。持。の。哥。ふ。て。玉。梓。之。道。尔。出。立。往。吾。者。公。之。事。跡。乎。大。負。而。之。將。去。と。有。り。今。其。意。を。考。ふ。依。り。年。ま。祢。く。馴。親。み。あ。る。人。と。今。立。別。れ。あ。む。事。の。い。と。哀。く。悽。は。し。丸。思。也。る。よ。付。て。也。事。戸。ち。ふ。言。を。絶。妻。之。誓。と。も。あ。り。て。妹。春。の。中。

さすふ。末永く絶離る。程此事あまバ中々今餞別
の扱うる公とゆ。その離別の誓とる事跡をし。於此受
賜を正負持て夫婦ふをあら。祿と。馴親み於る睦びを断
て出立む。是却りて心安のら。年を離別を悲しみ思ふ
餘。此段の故事。依てか。○如此言則とは。石を引塞
くは詠出られ。あるあるべし。○汝。固と。此。顯。固をさ。於。亦。抑
て。事。戸。を。度。し。給。を。云。○汝。固と。此。顯。固をさ。於。亦。抑
御親生成。給。予。依。固。城。し。も。か。く。他。げ。小。詔。ふ。彼。固。此。固。の
隔。を。思。へ。ば。甚。も。悲。哀。也。御言ふ。さ。正。に。る。○千。頭。師。云
千人と云。ぶ。き。を。如。此。詔。ふ。也。絞。り。お。き。と。依。御。言。亦。正。同
事。を。次。す。は。千。人。死。と。云。ふ。お。合。せ。て。思。ふ。ぶ。し。産。紀。す。は
千五百頭と書れ。とる。何。ぞ。や。あ。る。文。よ。○絞。ハ。師。云。字
拘。り。て。古。語。を。思。ふ。さ。ぬ。故。の。あ。り。さ。あ。り。○絞。ハ。師。云。字
鏡。小。縊。絞。也。經。也。久。比。留。と。何。正。頸。を。志。絶。て。殺。は。を。云。漢
固

の代々此死刑の中。ふも絞と云。さて今。あ。殺。と。何。ら。で。
あり。周。礼。ふ。誓。と。云。も。此。あり。絞。殺。也。ある。は。い。ぎ。上。代。ふ。人。を。殺。去。お。は。も。は。ら。絞。し。お
や。有。ら。む。ま。と。殺。ふ。さ。ま。く。何。も。身。に。傷。を。あ。る。絞。
え。祿。む。の。く。のみ。傷。に。故。神。の。殺。し。給。ふ。為。其。跡。あ。ら。は。ふ。見
云。ふ。り。や。○然。爲。之。則。師。云。絞。殺。を。さ。に。上。了。也。如。此。爲
也。云。ひ。あ。く。ふ。は。か。く。云。は。文。を。加。す。あ。る。此。み。あ。ら。ま。凡
て。加。久。と。志。加。せ。也。細。く。云。ハ。差。何。正。加。久。を。我。り。於。死。と
依。事。ま。と。は。し。當。正。の。依。事。を。指。て。云。志。加。は。向。ふ。人。未。あ
向。ふ。物。お。於。ま。と。る。事。ま。と。その。言。事。あ。ど。を。指。て。云。此。と
其。との。差。此。如。し。文章。よ。上。字。承。て。云。は。れ。ま。と。如。是。也
然。之。を。通。ハ。志。て。云。る。お。や。も。古。事。記。中。ふ。有。背。子。が。如。是

恋れこそ云くかどのぬぐひた。○産屋を末ふ其事見也。然と云はききを如是と云有り。○彼處ふ注はし。第百六段。師云。今ぬぐ産むとは詔ハて立産屋としも詔有るは上代の言ふ子を生成然云あらはし。○榮花物語卷根合。ふ。大將殿も女御の御産屋四月ぬる。ふ。今二月三月をぬぐさせとるは産あてぬる。いみじう。ちれしうねおしおげく云く。おれも御産のおとを御うぶやせ云ふ。○師云。上の將統殺を久毘理許呂佐那。おの當立を多氏く。那と訓はし。其を崇神卷歌ふ。伊傳氏由加那。出て行。仲哀卷。忍熊王歌ふ。迦豆伎勢那。和。潜。せむ。はと伊邪阿波那。和。禮波。いざ逢。む。万葉一。去來結手名。我をあり。

いざ結て。まこと一。君爾因。奈名。君小因。おはと玉藻。菊手。むあり。おれら。牟と云はき。哉那と云。てむをてあれむ。名。菊てむ。おれら。牟と云はき。哉那と云。てむをてあれむ。古語の一。此格あり。けて如此。交ふ詔ふをぬぐ多からむ。おをを云ふて。必志も千と千五百の數ふ限らむとふは。非。○莫來ハ。久那と訓はし。那伎曾と訓。其を此ふ因て。成坐る神の久那斗神を申は御名を負坐る。本因の處おれむ。○杖を和名抄ふ。杖。和名都惠を。○千人は。師云。知比登。千五百人。知伊富比登と訓はし。凡て人の數を比登。布多理。美多理。與多理。おぞ云。皆古言おれど。仁徳卷。哥よ。比登。理。書紀。同卷の哥よ。赴。駄利。又夜。儂利。おどあ。但し。三人。四人。おど。此例を以て。いは。一人。二人。

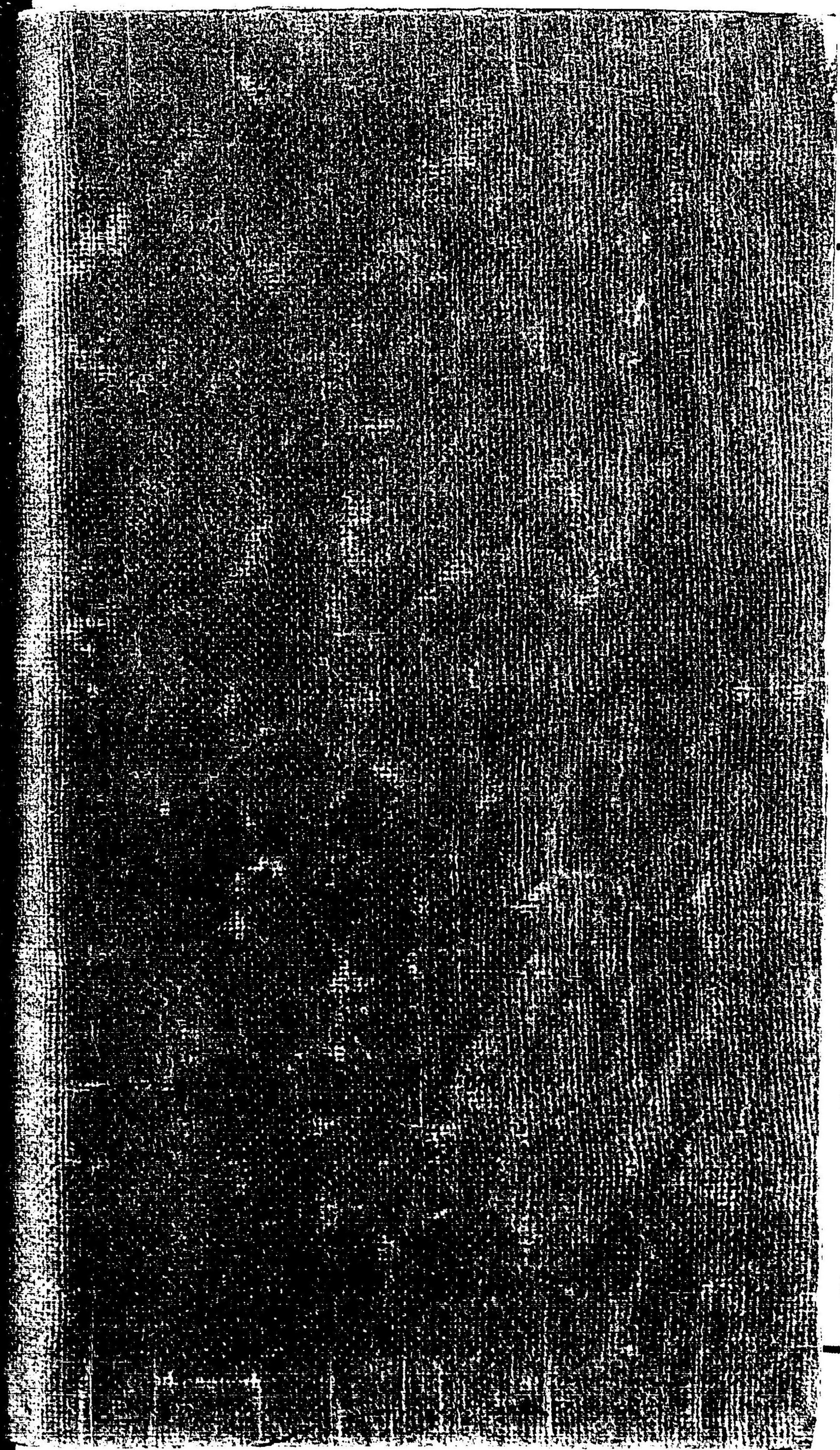
をも比登多理布多々理を云はきふ是のみ比登理布多
理と云ふ比登理を多を省き布多理を多くを約して多
を云ふ書紀神武卷一人を毘儂利とあるも登多を
約して儂と云ふありさして右の馭儂利とあるも登多を
ば何れも登多を濁るべきなりとも思はるまじ記す比登
理と何れも此の准子て皆常にお云はく清むはきありさ
て又さきよハ書紀五婦人をいづく清むはきありさ
をいづく言ふ訓の一人ハ座二人座三人座四座の
切に四座の言ふ一人ハ座二人座三人座四座の
人をも四座の言ふ一人ハ座二人座三人座四座の
效ひて後ふ設する言ふおそら多死を云ふは神武
紀此歌よ愛彌詩鳥毘儂利毛く那比苔蝦夷字一人と何
依如く若干比登とぞ云きむちまを書記壹百人れどある
訓も古言 ○死ハ師云志邇と訓は雄畧紀の歌よ伊能
知志那麻斯と何也お布万葉も古言お也今云第九十
八段目見え

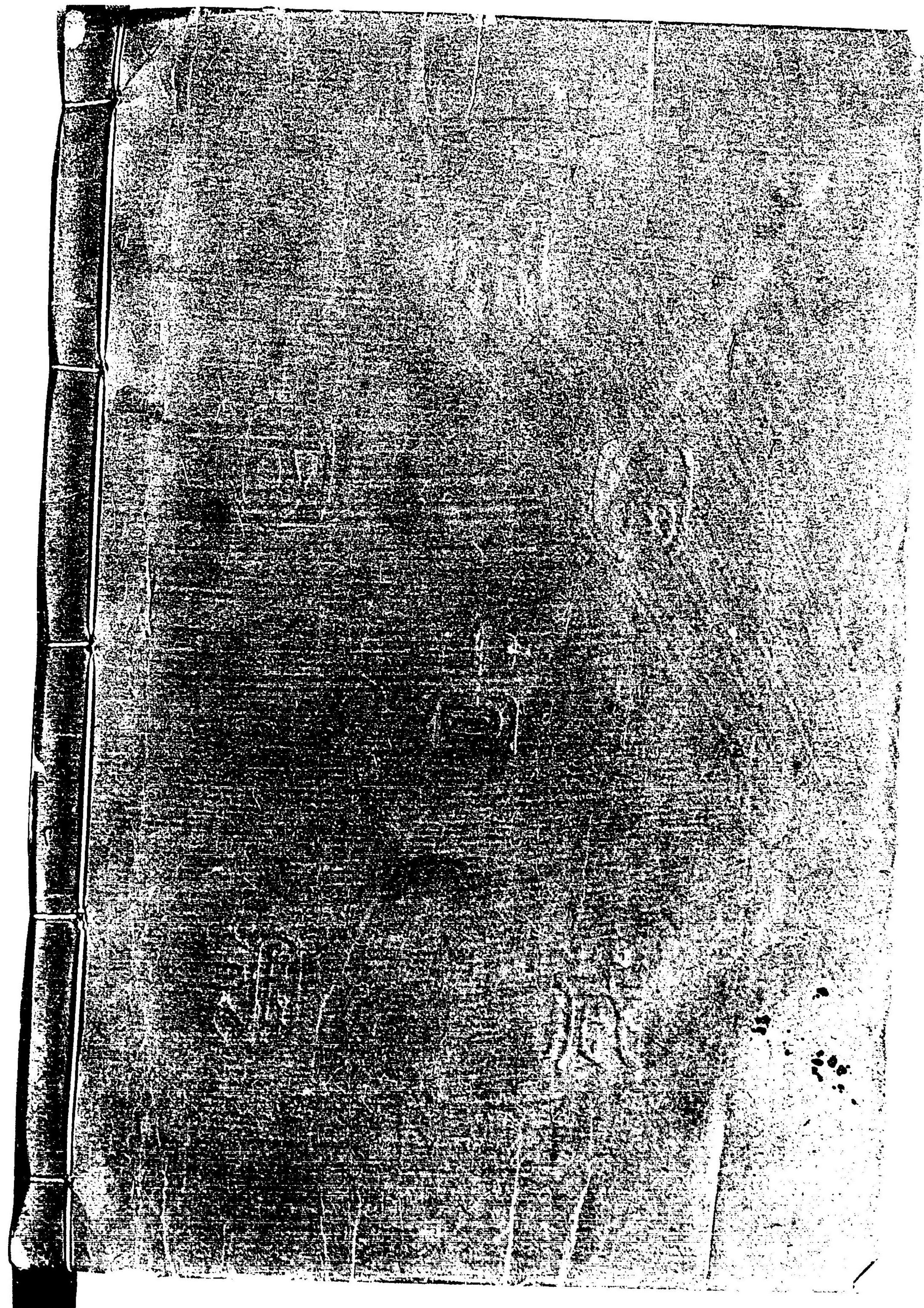
とる沼河比賣歌よ伊能知波那斯勢多麻比曾とある斯
勢を令死ふておまき死てふおとの哥よ見えとる始り
志爾ハ過去お也須岐を志せ切る志奴留ハ過去おぬ
然るを志迹を死字 ○生也師云世ふ日くお死る人て也
此音と思ふは非交 ○生也師云世ふ日くお死る人て也
も生るゝが多かるは今此御言よ由ま也大祓詞よ因中
爾成出武天之益人等と見えまよ青人草と云も此意お
依おと上ふ云るが如し凡て人の死るは豫母都大神の
御所爲よて此の千頭將絞殺と詔子依御言の驗ふ因也
生出るは伊邪那岐大神の御恩頼ぞかし漢因りハ此傳
命おと云死るを聖人此詔言よ欺れ 千五百人那母と訓
まよ空理を信受るひがおとあり 千五百人那母と訓
む那母ハ續紀此宣命おぬいと多死辭了て後世の文

章マサ小コ那ナ牟ムと云是れゆ。那牟も那母の
轉れるあり。

○鏡胤云。おれ巻を板了彫らせゑる協者也。甲斐、国巨摩、郡江原、里人、内藤昌實。同郡古市場、邑小住る。矢崎隨美、はと同所ある。矢崎、豐長られ也。

11/14





175
34
///

古史傳

五